

R&V

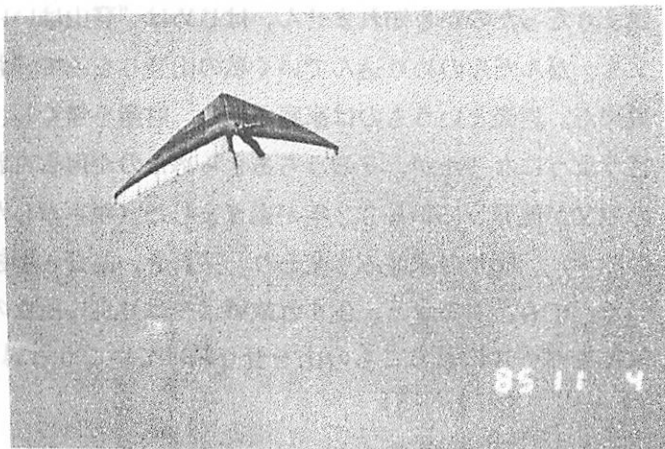
1993年
夏号 7月～9月
第10号

わが故郷（八郷町）

先日、我家の屋上にあがってみました。毎日暮らしていても、しょっちゅう上がるわけではないのですが、天気良かったので急に上がってみたくなったのです。私の住んでいる所は周りを山に囲まれている、いわゆる盆地なのです。昔は柿岡盆地といいましたが、いまは町名が変わりましたので八郷盆地といいます。

南の方を見てみると、筑波山から続いている表筑波連山。ここの稜線にはパープルラインという有料道路が通っています。ハンググライダーの基地があり、私も何度か飛んだことがあります。このエリアはあまり良くありませんが、日曜祭日ともなると首都圏からの観光客で一杯になり、多くのギャラリーを前にスターの様な気分でフライトできます。これが良くてここに通うフライヤーもいますが、私の好みではありません。

西の方に目を転じてみると、空に向かってツンとすました筑波山があります。筑波山は八郷町から見ると三角形の奇麗な山なのです。以前は頂上直下の岩場がホームゲレンデでした。ボルダリングの波が押し寄せ、神としてまつてある岩の苔を引っ剥がし、チョークでベタベタと真っ白に化粧させられた筑波の神様は怒りに怒り、登攀禁止になってしまいました。午後からちょっとでかけて岩登りという、貴重な岩場はもうありません。



足尾山上空を飛ぶ本図

そして北の方を見てみれば、きのこ山、足尾山、加波山などの裏筑波連山から吾国山、難台山と続きます。きのこ山と足尾山と吾国山にはそれぞれハンググライダーとパラグライダーの基地があります。このエリアは私好みのエリアで、それこそ天気の良い日は、毎日昼休みに飛んでおりました。強力なサーマル（上昇気流）のため下りるに下りられず、午後の仕事に遅刻をしたことが何回あったかわかりません。私が飛んでいた頃は平日だと地元の2、3人しかフライヤーはいなくて（日曜祭日はたくさんいたが）、それこそ私達の専用エリアでした。いまは毎日、若者で賑やかです。登山ですと山には中高年ばかりなのに、同じ山でもここは若者ばかりです。稜線には舗装された林道が走っており、昔からあったハイキング道は寸断され、ハイカー達はこの林道を歩くことになります。きのこや山菜も昔ほどは採れなくなりました。

最後に東を眺めてみれば、碎石採掘のため頂上を無残にも削り取られ、形が変わってしまった竜神山があります。西上州の叶山や秩父の武甲山と同じなのです。山麓にはゴルフ場が3つもでき、これまた毎日のように首都圏からお客様がおいでになっております。

今こうして周りの山々を見てみると、若かりし頃（今でも若い）の事が走馬灯のように浮かんできます。私が初めて買った登山用品がナタとキャラバンシューズでした（なぜナタを買ったのかは思い出せない）。雪が降ったある日、私はこのナタを持って加波山と足尾山を歩きました。当時はもちろん林道などありませんでした。午後からの登山でしたが、膝下のラッセルをしながら暗くなる寸前、ふもとに下りた私は大きな満足感を得たことをはっきり覚えています。今思えばこれが私の登山人生の始まりだったのかも知れません。はじめは“登山はいいスポーツだ”といていた親父も、だんだんのめり込んでいく私の山登りをみて“おまえの山登りは趣味ではなく道楽だ。道楽というのは家庭を壊し、財産を無くし、やがて人生の敗者になる”と言うようになったが、そのうちあきらめたのか何も言わなくなっていました。その親父が他界してから22年が過ぎました（親不孝したから早く亡くなってしまったのです）。周りの家並みも変わり、茅葺き、藁葺き屋根なんか全く見られなくなりました。でも、ふるさと、生まれ故郷はやはり良い所なのです。私は、これからもこの故郷をベースにおちこちの山を登り続けていこうと思っています。

（本図一統）

目次

岩壁会報

1993年 夏号 7月～9月 第10号 ACC-J茨城

わが故郷(八郷町)	1
集会報告	4
山行報告	5
川浦谷本谷	6
奥武蔵川浦谷本谷	8
奥武蔵川浦谷烏帽子谷	11
第2回フリークライミング古河大会に参加して	12
上州武尊山木の根沢大沢	16
渓谷から岩壁へ	
宝剣岳中御所谷本谷から中央稜のはずが?	18
93 ツール・ド・フランス追っかけ日記	24
あ～まぼろしの足尾沢	33
無念の足尾沢から奥竜神廻行	
& 御岩山ゲレンデへ	38
息子と登った白馬岳	43
ああ我が夏休みよ～飯豊連峰縦走	45
夏合宿黒部上の廊下廻行	48
谷川岳南面ヒツゴー沢	55
谷川岳西面笹穴沢	57
仙丈岳	60
初体験 IN 足尾沢	61
西藏旅行ーチベットからの手紙	64
アプローチのような大雲取谷廻行	69
あ～あ、やっと来たのに・・・中岩沢	72
友好山岳団体の月報、会報紹介	77
編集長の任命にあたり	78
編集後記	79

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

水 目

7月7日

出席者 本図、高田、古山、菊地、馬淵

7月21日

出席者 生井、古山、栗原、笹沢、本図、菊地、高田、馬淵、佐藤

8月18日

出席者 本図、生井、古山、佐藤、高田

9月1日

出席者 本図、中島、高田、古山、菊地、佐藤、長久保

9月16日

出席者 高田、本図、古山、菊地



山行報告

7月4日	奥武蔵川浦谷本谷	L本図、古山
	〃 烏帽子谷	L高田、笹沢、庄司
7月4日	古河人工壁フリークライミング大会	生井
7月11日	上州武尊山木の根沢大沢	L本図、佐藤、古山
7月17～18日	宝剣岳太田切川中御所谷本谷	L本図、古山
7月26～27日	尾瀬沼	鈴木、他1名
7月31日	越後清津峡足尾沢	L本図、生井、古山
8月1日	奥久慈竜神峡	L本図、生井、古山、庄司
8月4～6日	白馬岳～朝日岳	鈴木、他一名
8月4～6日	飯豊連峰縦走	中居単独
8月8日	お岩山	本図、笹沢
8月10～14日	北穂高→槍ヶ岳縦走	L馬淵ほか数名
8月12～16日	北アルプス黒部上の廊下	L本図、生井、佐藤、古山
8月22日	谷川岳南面ヒツゴー沢	L本図、庄司、古山、馬淵
8月29日	谷川岳西面笹穴沢	L本図、庄司、古山
9月5日	古賀志山RCT	生井、佐藤、古山、中居、他一名
9月7～10日	南アルプス仙丈岳	馬淵、他2名
9月11～26日	チベット高原	村上
9月11～12日	足尾沢	L本図、生井、佐藤、古山
9月19日	大雲取谷	L本図、生井、古山
9月25～26日	奥只見黒又川中岩沢	L本図、生井、古山

川浦谷本谷

1993. 7. 4

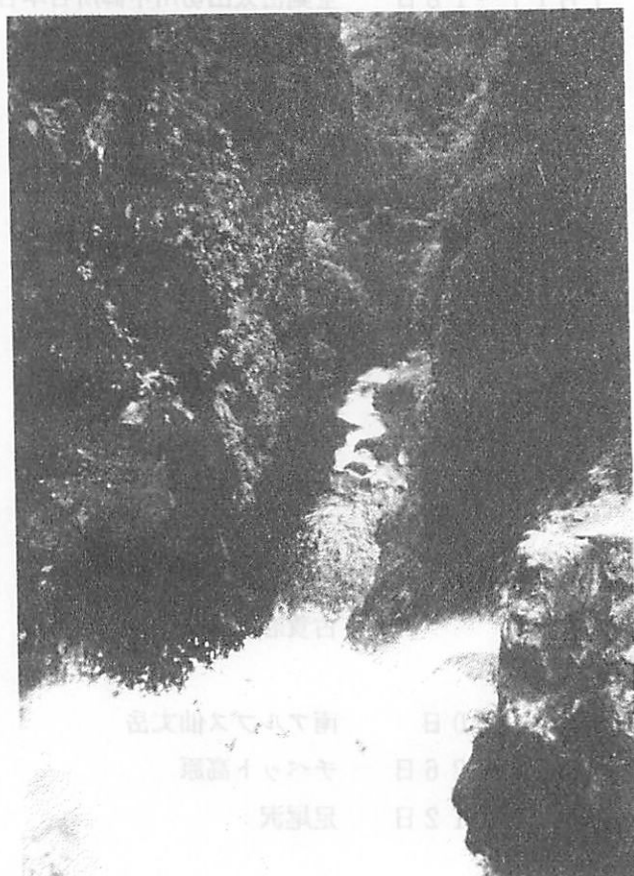
パーティ L 本図一統、古山正文

岩崎山

奥武蔵の川浦谷の遡行を行った。高田さん、笹沢さん、庄司君の3名が烏帽子谷に、本図さんと古山が本谷にはいる予定である。下妻に集合し熊谷、秩父経由で裏日野林道の通行止めゲートまで行き駐車する。林道途中でテントを張っているパーティもいた。車外で小宴後、就寝。

翌朝、朝食後出発し、林道を進み営林署小屋をすぎ約20分ほどで川浦谷にかかる橋に着く。我々が着いたとき、昨日の3人のパーティは本谷を遡行して行った。ここで烏帽子谷にはいるパーティと分かれる。

(烏帽子谷には10数メートル先の次の橋から入渓)はじめは問題となるところもなく順調に進み、ゴルジュに到着。最初の10m滝の左壁にはロープがフィックスされているが、その先の15m滝の直登はボルトが必要らしくまたその高巻きも悪いらしいのでゴルジュの入り口まで戻り左岸を高巻く。なるべく沢から離れないように高巻くため傾斜のきついところを

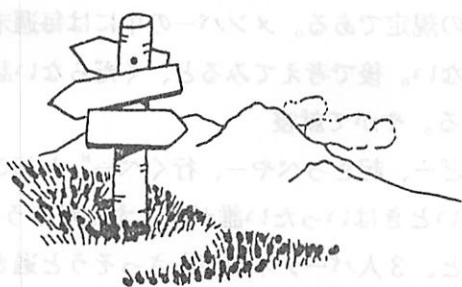


7ツ釜のゴルジュ

沢と平行に進む。途中、上の方から落石があり先行パーティはかなり上の方を高巻いているようだ。この高巻きは結局大高巻きとなり15m滝の上部へ支流の沢から下ってきたときには1時間ほど経っていた。

この後、右から小黒沢沿いの林道の腐ったつりばしをくぐり15m2段の滝の下で昼食をとる。この滝の高巻きはルート図と異なり右岸を高巻く。途中一箇所厭らしい所があり本図さんにロープを出してもらう。沢に戻ると二股に分かれた右の沢に入り、はじめの滝を左岸から高巻くと、わさび田跡があった。わさびを採った後、左岸の涸沢を登ると林道に出て終了。林道を下る途中一箇所道のわかりづらくなる場所があったが、慎重に道を探し下山。無線交信によれば烏帽子谷パーティはもう車の所まで戻っているらしい。川浦谷林道を下ったところは営林署小屋のすぐそばであった。後は車まで戻り、帰途についた。

(古山 記)



奥武蔵川浦谷本谷

1993. 7. 4

パーティ L 本図一統、古山正文

奥武蔵の谷に入るのは初めてである。案内書によると、奥秩父の谷に匹敵するほどの険谷であるという。ルート図を見てみると、なるほど7ツ釜というゴルジュが悪そうである。ナニナニ！ゴルジュ内不明とは何だ！不明と聞くと見たくなるのが人間の心理。ここに行くことにする。（実は不明なんてことはなく、今の“東京付近の沢”にはしっかりと載っている。ただ私の見た案内書が古かっただけなのだ）

3日夜、さて今日の集合場所は下妻だ。下妻→古河→加須→熊谷→秩父のルートで行くのだが、このルートを使う機会は以外と少ない。奥秩父の一部と西上州の一部に行く時くらいだろう。群馬の道は蛍のケツだが埼玉の道はよく知らない。林道への入り口がわからず、あっちウロウロこっちウロウロしてしまった。裏日野林道の車止め付近は駐車スペースがなく、またウロウロ。結局、車止めの脇に止める。早速、ランタンとシートを出して、車座になり、宴会が始まるという、いつものパターンである。出発が遅いので現地に着くのは早朝、したがって宴会が始まるのも早朝。つまり、いつも朝酒をやるのである。でも、缶ビール1本まで。時によってはワインがプラスされることもある。しかし、朝になっても酒が抜け切れないほど飲んではいけないというのが暗黙の規定である。メンバーの中には毎週末一緒にの奴もいるのだが、話は途絶えることがない。後で考えてみると、くだらない話しかしていないのだが、これが楽しいのである。やがて就寝

朝“おー、朝だどー、起きっぺやー、行くべー”と起こしてやるのは、いつも俺の役目だ。俺がいないときはいったい誰が起こすんだろう。

準備をしていると、3人パーティが脇をさっそうと過ぎて行った。我々も重い腰を上げる。もっとも重いのは高田と古山で俺と庄司とひろみちゃんは軽いのだが・・・“ひろみちゃん、勘違いしないでね。腰は軽いと言ったけど尻は軽いとは言っていないからね”

秩父橋で烏帽子谷パーティと別れる。この時、先程の3人パーティがみえた。「はーん、彼らは先行なんだ」と思った。いつものごとく水にジャブジャブ入り先行を追う。佐藤の言葉で言うところの「のぞみ」のごとくスピードで進むが追いつかない。先程

まであった、彼らの足跡もなくなってしまった。“あいつら何処へいっちゃったんだべなー” “どっかへワープしちゃったんかなー” などと言いながら行くと、ドーンとでましたゴルジュ君。10m滝の左壁にはハーケンが連打してあり、フィックスもある。A0かA1で登れそうだが、時間がかかりそうだと、今日はゴルジュに登りに来たのではなく、見に来たんだとかいう理由をつけて巻くことにした。左岸を巻始めると、上からラクがきた。“えーこの上にさっきのパーティがいんのかな。そんな高く巻いちゃったら沢に降りらんめーよなー、俺に一言聞いてくれれば巻き方の一つや二つ教えてやんのによー、ばかたれが” などと誰も聞いていないのをいいことに好き勝手な事を言う。壁の中段をトラバースして行く。ゴルジュ内はいくつかの登れそう



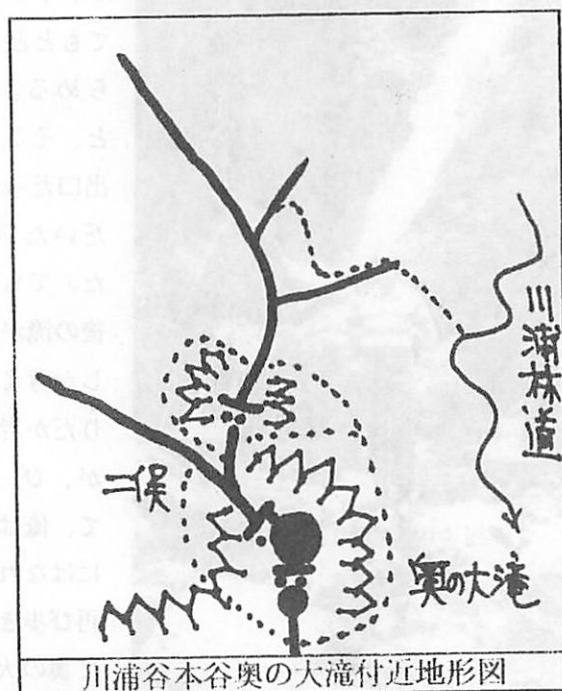
奥の大滝にて

な滝があり、沢に降りたい衝動にかられる。やがて、だいぶ古い懸垂用シュリングがあった。しかし、ザイルが1本しかないので、とてもとどきそうもなくあきらめる。枝沢から降りると、そこはもうゴルジュの出口だった。ゴルジュ内はだいたい見ることはできた。でも、登るとなると最後の滝が問題だ。人工登攀しか考えられないが、岩のりだか岩こけだか知らないが、びっしりと生えていて、俺はとても取り付く気にはなれない。小休止後、再び歩きだすとしばらくして奥の大滝に着いた。無線交信するが、相手の声は聞こえども俺の声は届かずあきらめる。ルート図による

と左岸巻きだが右岸が登れそうなのでそこを登る。そこはちょっと悪く、うちの変態長はなかなか登ってこない。ザイルを出すにもザイルは変態長のザックの中だ。しかたなく少し降りてザイルの末端を受け取り登りなおす。ザイルをつけた変態長は文太郎に早変わり、スイスイと登ってくる。ザイルとはありがたいものだ。滝上は“東京付近の沢”のルート図とは地形が違っている。そういえばフォールナンバーで見たことがある。その上の滝を越し左岸を登るとすぐ川浦林道にでられた。烏帽子沢パーティが待っているだろうと、いそいで下った。

車に着くと、今朝のパーティは、もうとっくに帰ったという。いったいあのパーティはどこを登ったんだろう。と、しばらく考えたが無事帰ったんだからどうでもいいか……

(本図 記)



奥武蔵川浦谷烏帽子谷

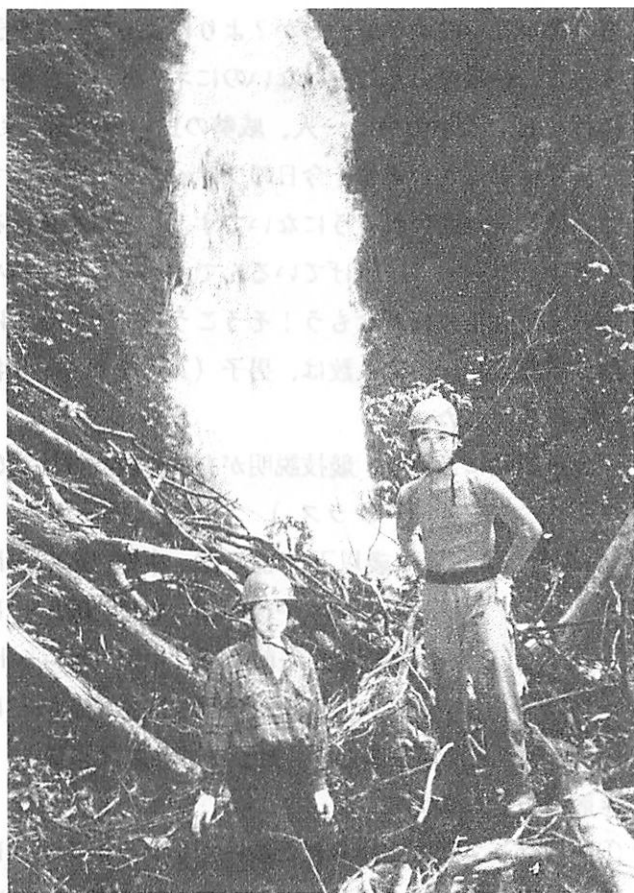
1993. 6. 4

パーティ L 高田暢年、庄司真陸、笹沢ひろみ

今回の山行は、あっという間にノーザイルで終わってしまったので、ほとんど忘れてしまいました。山行以外だったらやっぱり庄司君ですね。ツールドフランスを熱っぽく語っていた姿・・・とても印象的でした。でも文献でも、もう一度みながら思い出してみましょう。なにに・・・優美な滝場を内に秘め、その悪さはとても奥武蔵の谷とは思えず・・・ふーん。特に悪いところなくツルツル滑りやすいところもありませんでした。大きなチョックストーンを持った滝は左側から高巻をしました。きっとベテランの人は直登とかしちゃうのかなぁーすごいなぁー・・・。

それにしても沢登りは変化があるから楽しいですね。遡行時間は3時間程度。終了点で3人で手足をのばし、1時間ぐらくつろいで車にもどりました。そして、となりの沢に入った本図さんと古山さんをしばらく待っていました。3時間ぐらくは待ったと思います。それじゃあ沢登りの遡行時間じゃありませんが・・・その間やっぱり庄司君でしょーこの日は彼がヒットをとばしていました。

(笹沢 記)



登れそうにもない滝にて 笹沢、庄司

第2回フリー・クライミング古河大会に参加して

1993. 7. 4

生井一男

1993年7月4日、『空模様も今日は機嫌が良いみたいだ！フリー・クライミングをするのには最高だな』と独り言を言いながら、車のトランクにザックぶち込んで、一人古河の体育館に出掛けた。…8時過ぎには体育館に着いた。もうかなりの人が来ていた。みんな、競技会のルートを見て、ムーブの構想を練っているようだ。私は、初トライなので少々緊張さみ。

まずは受付にてエントリーを済ます。この時にクジ引きで順番を決めたんだけど、運が良いのか？悪いのか？よりによって一番を引いてしまった。（幾ら一男だからって、一番を引くことはないのにネ。参った、参った、）もう一度ルートを確認しに行くと、人垣の中に一人、威勢の良い声が聞こえる。青峰山の会の高橋さんだ！『御早様御ございます、今日のフリーのレベルは高すぎませんか？ 5. 11 dなんて、俺じゃ到底登れそうにないですよ』と声を掛けると『そんなことはないですよ、前回よりグレードは下げているんですけどね！アハハ』と軽快に笑い飛ばしている。いやあ！余裕一杯だなもう！そうこうしているうちに厳かに、開会式が行われた（午前9時開会）。参加人数は、男子（A）クラス15名（B）クラス4名、女子2名、計21名でした。

競技開始に当たり、競技説明が有り、競技方法及びルールは下記のとうりでした。

	（ クラス ）	（ ルート ）	（ グレード ）
男子（A）	40歳以下 午前の部	中壁 赤ルート	5. 11 d
	午後の部	右壁 灰ルート	5. 11 c
（B）	40歳以上 午前の部	中壁 緑ルート	5. 10 c
	午後の部	左壁 赤ルート	5. 10 d

女子（A）年令問わず 男子Bクラスと同じ

*競技方法について

①…各クラス別に定められたルートをクライミングし、完登するに要した時間を競技する。完登は最後のホールドを掴み、終了点のカラビナにロープがクリップされた時点で成立します。

- ②…午前部のクライミングは、トップロープ方式で競技します。午後部のクライミングは、リード方式で競技しますが、選手はすべてのクイックドロ（ヌンチャク）にロープを順番にクリップしなければなりません。クイックドロにクリップせずに、それを体のすべてが通り過ぎた場合は最高到達点が計測されると同時にクライミングは中止されます。
- ③…クライミングの制限時間はスタートの合図があった後、10分間とする。
- ④…制限時間以内に完登できない場合は、クライミング途中の最高到達点を記録する（左右どちらかの手がタッチしたホールドとする。直十の評価有り。）
- ⑤…指定されたルート以外のホールド及びスタンス並びに左右の壁の角（コーナー）換気窓の枠を使用した場合は1タッチ毎に2点を減点する。
- ⑥…クイックドロを掴んだ場合は（2）の規程を適用する。
- ⑦…ロープの結び方は8の字結びでハーネスに直接結んで下さい。

*時間点数の計算方式 （50点×2回＝100点満点）

得点係数＝50÷（制限時間－規定時間。小数点以下第4位を切り捨てとする）

規定時間＝トップ競技者の完登所要時間

得点＝得点係数×（制限時間－所要時間。小数点以下第3位を切り捨てとする）

*ホールド点数 （50点×2回＝100点満点）

1ホールド＝2点とする。合計1ルートで50点とする。

との説明が終わり、大会進行委員より

『では、競技を開催しますエントリーNo1番、生井一男さん準備をお願いします』との進行者の声に、眩しい日差しの中、その人は、みんなの注目を背中に浴び、悠然と姿を現した。彼は静かに手にチョーク付けて、これから登るルートを一目し、不敵な笑みを浮かべ取り付いたてっかー何はともかく1番というのは、非常に注目される。いわゆるヒーローである。心の中では、ここでみんなに良いところ見せてやろうなんて不埒な事を考えていたがしかし、5.11dの壁は厚かった。まず出だしは、細かいスタンスに乗り、微妙なバランスで体を引き上げる。出だしから2mぐらいまでは、どうにかごまかしゴマカシ登ったが、その先はホールドが細かく、人差し指と中指の第一関節でやっと止まっている。スタンスの方もどうにかグリップしているが、この体勢では、やがて力つき落ちてしまう。右手と左手の入れ換えしたり、色々なムーブを試してみるが引き上げるには、ガバホールドが欲しい！あと10mで得点ホールドに手が届く。『畜生！レッドラインはどうか越すぞ！デヤァー』（3

m地点から得点圏になる)ふと見ると左に緑のガバホールドが見えた。ここで減点でも良いから上に移行しようと手を入れ換え、緑のホールドを掴み、それを軸に得点ホールドを掴んだ。やっとホットしたのもつかの間、今度はもっと辛くなったホールドは前と同じ様なのだが、スタンスが今度は、膝上15cmで足が上がらない。ジリジリと右足を上げ、どうにかつま先が乗りそうな感じになったが、やはり体が伸び過ぎた!体がフリーズ状態になりそして『あぁ…』と言う声と共に左足が、滑り落ちてしまった。これで、私の午前の部は終わった。後はひたすら見学者&批評家に变身していた。『剥がれろ!』『ランジ!男だったら飛べ、飛べ、飛べ!』等の高橋氏のやじが飛ぶ、私もつられて同じような事を、叫んでいた。

前回は、初見にて(選手は、人の登りを見れないようにして競技、いわゆるオンサイト)トライだったのが今回は、もっとラフにと言う事になったみたいで、みんなで、人の登りを見てワイワイにぎやかなものになったようだ。だからヤジやら、応援やらの声が飛び交う、それでもラベル、いや元い、レベルは高く大体3m~7m位でみんな落ちていた。でもヤッパリ津久井、小島、常富の3名が、時間内に余裕で完登した。3人共、私より年上なのに上手だ!俺だったら股関節か外れちゃうぐらい足を上げてスタンスを取りに行っている。本当にバランスがいい、あれだったら中国の雑技団に入れるな?もう人間じゃない。俗に言う『スパイダーマン』という奴だ。と感心するやら、呆れるやら、と見ていた。

話しは変わるけど、これじゃ後から登った方が、断然有利じゃないかなと?だよな、ダヨネと人より気の小さい小生は、小さな声で、『一番最初の方は、良い見本になっちゃって損役だよなあ~ブツブツ』と独り言の様に言っていたら、『たしかにそうだよ、前の人の登りを見ていると、ムーブが分かって、順序よく手足の動きが、分かるな』との声が、チラホラ…そしてそれが聞こえたのか?大会運営委員より午後の部は、『公平をきずと言うことで順序を逆にします、1番最後の人が、午後1番ですので、注意してください。』と話しが有って、昼飯になった。

昼飯は、前にここで知り合った、石岡山岳会の木村さんと体育館の前にある回転寿司を食べに行く。

午後は、リード方式に変わり、3m地点にヌンチャクが、セットされていてその上にも、均等にある。それにクリップしていく(最初のヌンチャクは、安全の為にクリップしてあった)。

俺は、今度は一番最後なので、日蔭に銀マットを敷いて(木村さんのだけ)、横

になって見学、ビールでも飲もうかな？いやコーラで我慢しょ！なんて思いながら見てた。午前のトップロープとは違うのか？それともやっぱりリードは難しいのか、2番目のヌンチャクにクリップ出来ないようだ。それでももう少しという所まで行く人は何人かいたが、ヤッパリ出だしが、難しいようだ。そして午前の部で、余裕で完登した津久井さんの登場だ！みんなの視線が集まる。かなりやっているらしく、見ていても優雅に体を動かして、余裕すら見える。午後は、津久井、常富、の2名、小島さんは、チョットとちり、もう少しの所で落ちてしまった。

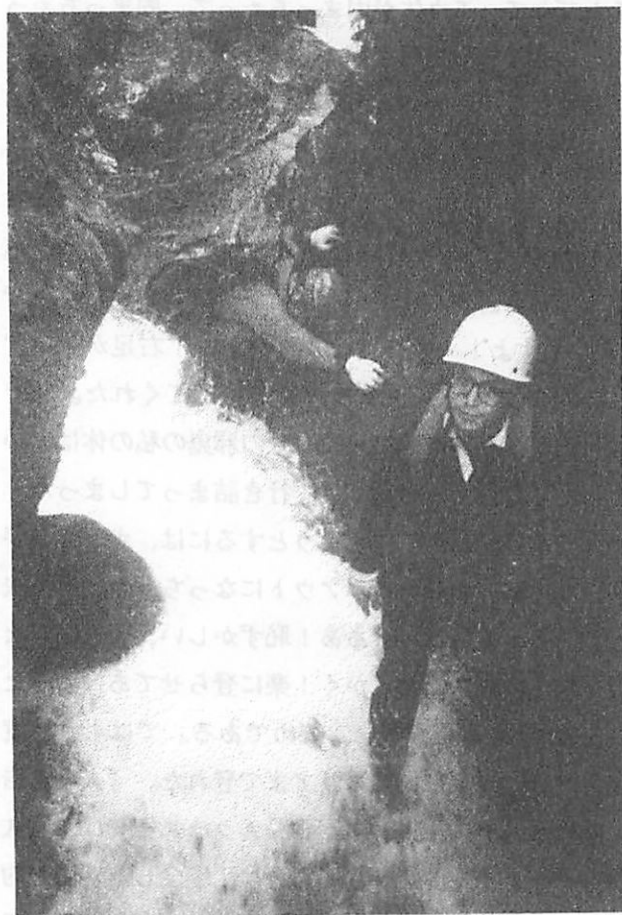
そして最後の選手の俺を呼ぶアナウンス、ゆっくりとラバーソールを履く。『生井さん、居ませんか？生井さん準備をして…早くお願いします』との催促の声『ちょっと、待って、今行きます』と答え、ゆっくりと出て行く。遅くなった言い訳をするんじゃないけど…『随分と待ちくたびれて、モウ体が固まっちゃって、固まっちゃって、もう大変！一番最初と一番最後じゃ、もう退屈で帰っちゃおうかと思ったよお』と、気の小さい小生が愚痴を言うと言行役が、『そうですか、それじゃ今まで、ずいぶん待って戴いた最後の選手の為に、みなさん盛り上げてあげましょう。皆さん拍手ワアァー！』と上げるは、上げるはで、少々照れくさかった。これじゃ、完登出来ないでも、声援に答える様な登りを見せなくちゃと思いながらハーネスにザイルを結び、登ろうかとした時、ビレーをしていた宮本くんが、(古河FC同人所属)小声で『生井さん、最後だからサービスしますよ！一番最初のスタンスは、右足からですよ、右足から乗れば、出だしは楽に行けますよ』とアドバイスをしてくれた。『そお！右ね、右足からね』と頭では、分かっていたのに元来、天の邪鬼の私の体は、いうことをきいてくれず、左足を出してしまい2mぐらいで、行き詰まってしまった。どうにかして足を入れ換えないと動けない、しかし替えようとするには、ホールドが厳しく動かすと、剥がれそうで動けない、いずれタイムアウトになっちゃうと意を決してトライするが、ヤッパリ落っこちてしまった。『ああ！恥ずかしい、畜生！』と言ボツリそして、宮本くんが追い討ちの様に『せっかく！楽に登らせてあげようとしたのに、』と言、言われてしまい返す言葉もない。惨めである。ではもう一度と、右足からやってみると何のことはない、楽に得点エリアまで登れた。『人の忠告は、聞く物だな』何はともあれ、競技は、無事終了し表彰式、Aクラス優勝は、津久井氏、Bクラスは、常富氏で、フリー・クライミング古河大会は、閉会した。個人的には友好的な大会で、色々勉強出来たし、知り合いもたくさんでき、楽しい一日でした。(生井 記)

武尊山木の根沢大沢

1993. 7. 11

パーティ L 本図一統、古山正文、佐藤文則

今回は野望の山行 Part 1 である。遡行記録にはどうしても越せないとある大きな釜を持つ滝と、12メートルの大滝に行こうと言うのである。本図さんと一緒ならどんなところでも行けるような気がしてくるから不思議だ。きっと今回も上手く行くだろう。そう思いながら谷川岳への道を分け目的の林道を行く。水上から奥利根湖へ



ゴルジュを行く 古山、佐藤

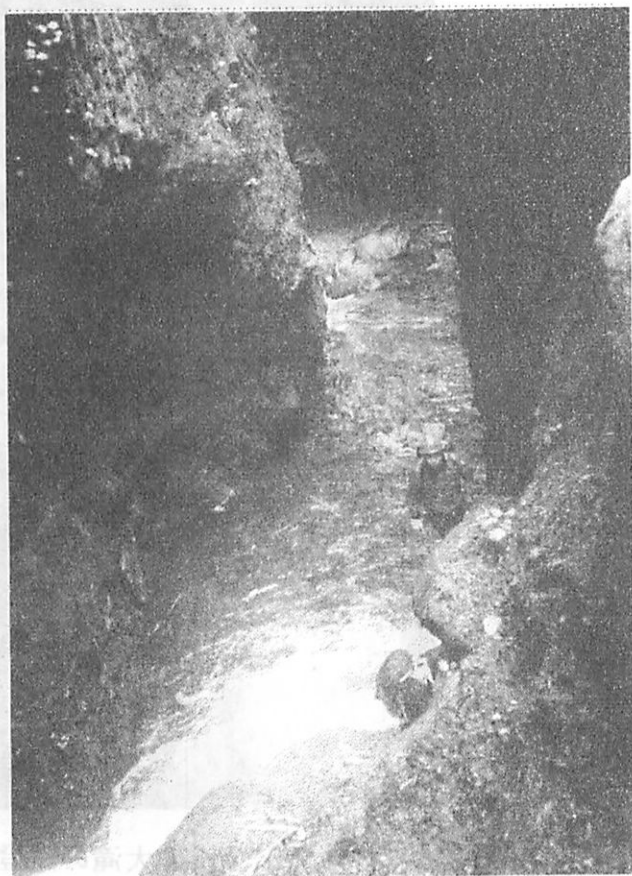
の道で、昨年温泉に入りに来た道である。その湯の小屋温泉を過ぎ暫く行くと前方右手にゲートが見え車を止める。明日の話をしながら一杯やり、完登の夢を見ながら朝を迎える。今日は遡行自体は短いということでゆっくりと起き朝飯を食べた後、ゲートのロックが以外に簡単に外せる事を発見し林道の中へ車を乗り入れる。木が覆いかぶさり車の窓や屋根に枝や葉が当たる細い道を路肩に注意しながら少し入り、道が沢からそれる所で車を置き身支度を整えていざ入渓する。

幾つかの滝の上流部に降り立ちすぐにゴルジュ帯へと入る。しかしそんなには深いゴルジュでは無く、難無く越して行く。遡行図で越せないと

いう大きな釜の滝らしい所へ出、ザイルを出して水流中央から左岸を登ろうと相談している所へ後ろから本図さんが追いつき、何のためらいも無く水に入り、右岸に取り付きあつと言う間に登ってしまった。アッケに取られながらも後が続く。ルートの方と、水に入る度胸の無さを感じる・・・。

登れない、と言うにはあまりにアッケな過ぎたので、まだ先に有るのかも知れないと言っている内に12メートルの大滝に出る。なんとなく登れそうな気がするが本図さんは無理だろうと言う。しかし、水線の右を上がればホールドが有るような気がして登って見ることにする。

2～3メートルばかり佐藤が登ったあと、本図さんがザイルをつけて登り出す。ハーケンとボルトを一本ずつ打ち、さらに上を伺うが、岩質が泥岩というよりも土壁といたほうがいいくらいで、ボルトも打てないようで苦労する。それでも何とかさらに上の地点にボルトを打ち、降りてくる。今度は佐藤がザイルを付けて行く。2本目のボルトの地点までは難無く行くが、そこで詰まった。さらに右へ出ると滝の落ち口から離れるのであまり行きたくない。水流に半身濡らしてホールドを取り2本目のボルトに立つ。しかし、ここでまた詰まった。後2～3メートルも行けば抜けれそうなのだが行けないのである。今度は水流の中も手に取るホールドがことごとくはがれ、何も手掛かりが無くなってしまったので



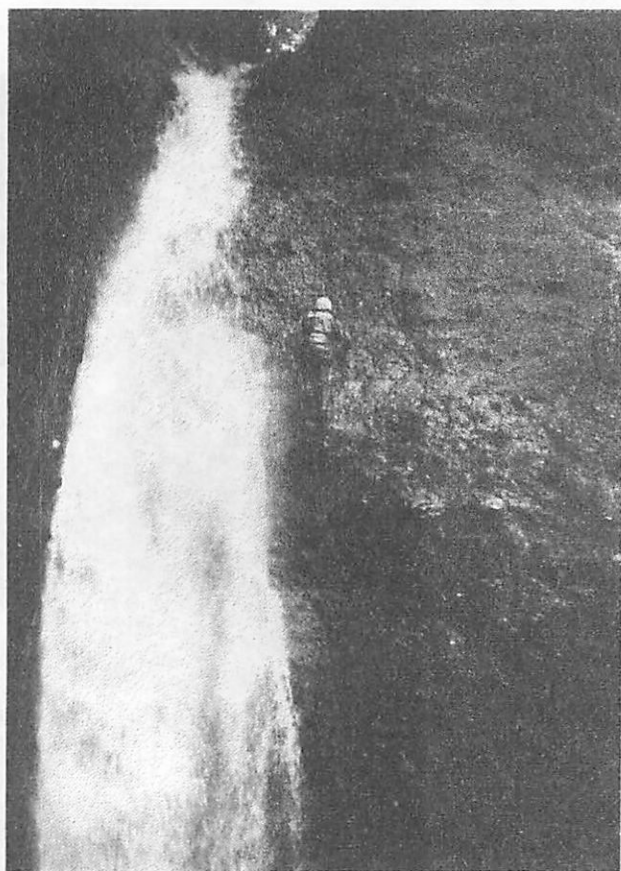
ゴルジュ内の滝を登る

ある。目の前の窪みに手が掛らないでもないがやはり怖い。どうしても次の一歩が出ず敗退する。この滝を登るにはハーケンよりも、5寸釘を5本位持ってきたほうが有効である。

少し下流の左岸を登り、滝の上に出て、上から滝の様子を探り飯を食って下山した。

この、大滝の上で本図さんは岩魚を見事に釣り、私たちにふるまってくれました。

(佐藤 記)



12 mの大滝の試登

溪谷から岩壁へ 宝剣岳中御所谷本谷から東面中央稜のはずが？

1993. 7. 17~18

パーティ L 本図一統、古山正文

我々バリエーションルート登攀を主体に活動している者にとって、谷を廻行し、壁を登り、頂上に立つことは理想的な登山形態であろう。北穂高の滝谷や甲斐駒の赤石沢は一般的に知られているが、剣岳の剣沢や池ノ谷でも可能である。ボルネオのキナバルローズガリーもおもしろいと思う。今回はそれらのルートと比べることもできないくらい易しいが、普通の沢登りと違った期待を持ってでかけた。

17日。管の台から一番バスに乗り、しらび平下車。すでに観光客が後からくるバスで、どんどんおしよせてくる。天気は良くなく、せっかく来てもなにも見えないんじゃないかな、と気の毒になる。おそらく観光客たちも、この天気にあの支度でどこに行くんだろうと思っていたにちがいない。ロープウェイの下（中御所登山道）を歩



日暮しの滝



スラブ状滝を登る



スノーブリッジを越える

いて行くと、すぐ谷にでる。最近大增水があったようですごく荒れている。はしがが流され、ショルダーを一カ所使った。日暮しの滝下で廻行準備をしていると、頭上をゴンドラが行く。今日はお客が多いとみえてフル運転しているようだ。私もゴンドラには何回か乗ったことがあり、そこから見た中御所谷は、滝を連続して懸け、あたかも、しらび平から千畳敷まで滝だけでつながっているようにも見える。その時、心の中で「この谷は絶対登る」と誓ったものだった。今、その時がきたのである。7月というのに肌寒く、日暮しの滝の直登で全身ずぶ濡れになり、芯まで冷えきった体は震えが止まらず、ゴンドラの客に手を振ってあげるサービスは、いいかげんやめて先を急ぐことにする。その上の滝は直登できず、左岸から巻き懸垂下降。水量が多く滝も迫力がある。スラブ状の滝がいくつか続くが、沢慣れた人ならノーザイルでもOK。しかしスリップすると滝壺まで止まらない。私達は当然ザイルを使用した。この辺は直登できる滝が続く楽しい。が、シャワーを浴びるので寒い。それにベソをかいていた空も、とうとう泣き出す。いよいよ最狭部に入っていく。幅3mといった所だろうか。へつったり転石ずたいに進むのだが、油断をすると急流に流されてしまうので真剣そのもの。その時、急に泥水が流れてきた。“すや鉄砲水のはしり”とドキッとしたが、鉄砲水が出るほど降りには強くない。恐らくSBの崩壊であろう。前途多難が予想される。10mCSは資料には左岸巻きと書いてあるが、右岸にルートをとる。いやしかった。予想されたSBはすぐに現れた。右岸から真下を駆け抜ける。その上はルート図には登れないと書いてある10m、30m、10m、15mと続く（これは資料による高さだが、実際はこれより小さく感じた）。最初の10mは左壁を直登したが、後は手が出ず右岸を巻く。再び出てきたSBは左岸を巻くと、40mの滝が行く手を阻む。水量の多さもあいまって迫力満点。見た限りでは直登できそうに思える。でも今日は遠慮願う。だって寒くてそんな元気、でてこないのだ。左岸の枝沢の15mの滝は傾斜は強いがホールド、スタンス共に豊富で簡単（ただしシャワークライムだった）。この枝沢から上の100mの滝も一緒に巻きにかかる。ガスの切れ目からゴンドラが小さく見えたり隠れたり。この辺はニッコウキスゲの群落地らしいが、今はコバイケイソウが目につく。かすんで時々見えるのは100m大滝だろうか。なんか直登できそうな気がするも、ぼやけているのではっきりは分からない。この巻きルートは容易で、晴れていれば景色を眺めながら、さぞかし楽しく行けるだろう。といっても踏跡があるわけではない。巻き終わると、その上は10m位の滝が階段状に続いていて、どれも楽しく直登できそうだ。しかし雨で増水した流れは沢いっ

ばいに幅を広げ、冷えきった体はその中に入るのを嫌い、そのまま左岸を登って行くのだった。“せめて鏡の滝ぐらいは直登しようぜ”と言ったのはよいけれど、千畳敷の雪溪が解けたばかりの水は、針を刺すように冷たく“俺はまだ心臓マヒで死ぬのはいやだ”とかの理由でこれもパス。その上にも小滝はあったが問題なく千畳敷に着いた。皆さんご存じのように千畳敷は幕営禁止。少し戻り林の中にツエルトを張る。急いで着替え、ツエルトに入るとそこは天国であった。そこでなにか物足りなさを感じた。“そうだ酒がねーんだ！古山！酒が飲みてーな！千畳敷ホテルには売ってんだよな！あれを飲むと最高だな！”と言うと、古山は“いいですよ、いいですよ、今から買ってきますよ”と言ってでかけて行った。“古山あなたはえらい、やっぱり大人だ、将来きっと筑波大学の学長になれるぞ。そのときは、お祝いに缶ビールを一本ごちそうしてあげるからな。その代わり、俺のパカ息子を裏口入学させてくれや、な、な、たのんだぞ”などと勝手なことを言う俺であった。ツエルトの周りにあったモミジガサを、おひたしにして食おうと、ゆで始めたところ、目にしみて涙ポロポロ、咳がゴホンゴホン。“あれ！変だな！モミジガサでこんなふうになったことはねーな。



鏡の滝

食うのはやめっぺ!”という訳でやめた。はたしてあの野草はなんだったんでしょうか? だれか教えてちょ。そんなこんなで古山が帰ってきたので飲み始める。“買ってきました” “ごくろうさん、じゃ、飲もうか” “はい” “まずこれをいくか” “いえ私はこれをいけます” “え! じゃ、これ全部俺が飲むの?” “そうです” ガチョーンという訳で、買って来たは、買って来たは、ごちゃまんと。おかげでへべレケでした。

18日。雨のため中央稜の登攀は中止し、ロープウエーで降りる。帰路の途中、諏訪のサービスエリアでハイウェー温泉に入ろうとしたが、まだやっていませんでした。残念。

PS というわけで頂上は踏めなかったが、この天候不順による敗退が9月まで続き、今年予定していた廻行が全滅になるとは誰が予想できたろうか。

しらび平 (6:30) - 40m 滝下 (10:45) - 鏡の滝上 (11:40)
一千畳敷カール (12:25)

(本図 記)



「193 ツール・ド・フランス追っかけ日記」

1993. 7. 17~25

庄司 真陸

《7/17》

朝、夜行のTGVを利用してマルセイユに到着した。さっそく自慢の自転車「マリックススペシャル」を組み立てる。今日、ツール第13ステージはここ、マルセイユの街を出発するのだ。そのスタート地点へ向かおうとするのだが、日本のイベント時のように親切な標示板はまったくない。

「ツールを見にいきただけでどっちへいけばいいの？」

と、たどたどしい英語で尋ねるが案の定通じない。「ツール」という単語ひとつも通じないのだからいやになる。

しょうがないので駅で買った朝刊のレキップ紙（ツール開催中はどの新聞も一面トップで前日のツールの結果を知らせてくれる）を広げ「俺はこれがみたいんだ！」といわんばかりに「ツール！ ツール！」と連呼してようやく相手は納得してくれる。しかしそのたびに「どっからきた？ え、日本から。ツールをみるためだけに。ほんとかよ。フランスにはいつまでいるんだ？ etc」と聞かれまくるので、途中10人ほどに道を尋ねた私は駅からスタート地点までたった5kmくらいに結局1時間もかかってしまった。しかし、警官も黒人の学生もバーのおやじも皆親切丁寧に対応してくれるのでほっとした。

スタートを見学後、モンペリエの街へ移動し第13ステージのゴールスプリントを観戦した。そのあと駅前のホテルで泊まった。

「おまえ、フランス語をしゃべれないけど英語もダメだな。」とホテルの若いボーイに馬鹿にされ、なさけなかった。

《7/18》

モンペリエで第14ステージスタートを見学したあと、ゴールをみるためペルピニアンへ向かう。その際、車中で土屋さんと知り合えた。彼女は女手ひとつで日本最大の自転車レース「ツール・ド・北海道」を創り上げ、また海外のトッププロのレース手引き書を翻訳したり、国内の有望な若手をヨーロッパに送ったり、逆に海外の選手を

日本に呼び寄せたりと、日本自転車界の大御所的存在である。

「よくきみ、その語学力でフランスきたわねえ。」とあきれながら、レストランでの注文の仕方、ものの買い方など必要最低限の会話例を教えてくれた。そのうえコーヒーもごちそうになってしまった。土屋さんにはたいへん親切にしてもらい感謝しきれないが、なによりも彼女はひとりでがんばっているのだから俺だって大丈夫、ちゃんとやっていける、と自信がついた。

ベルピニアンで土屋さんと別れてゴール地点へ向かう。場所を確保して待つこと1時間ちょっと、ついに先頭の二人が猛烈なスピードで走り抜けていく。フランスのパスカル・リノとハゲ頭のオヤジ、イタリアのペリーニか？

そのあと駅前のホテルで宿をとる。

「今日のレース、おまえみたかい？」と宿のオヤジに聞かれた。

「もちろん、そのために日本からきたのだから。」

「そうか、今日フランスは勝った。フランスがチャンピオンだ！」とオヤジはうれしそうにはしゃいだ。ということはあのあとのスプリントをリノが制したのだろう。

「じゃあ、パスカル・リノが勝ったんだね。ブラボー！」と私も一緒になって喜んだ。



ベルピニアンの町にて

結局、フランス人はツール全20ステージ中この第13ステージしか優勝できなかったのだが。

《7/19》

ついにツールは難関ピレネー山脈に舞台を移す。今日はその全3ステージの初日だ。トロッコ汽車はバルセロナへの軌道に別れを告げ、山中レ・ツール・ド・キャロルへ向かう。

車中で知り合ったドイツ青年と話をする。リトバルスキーは年寄りでもうだめだ、と彼は言った。でもサッカーのことはよく知らないんだよ。

「一昨日第13ステージ、ドイツのルードリッヒが勝ったね。やったじゃん！」と話す
と彼は急に不機嫌になった。ルードリッヒは東出身の選手である。どうもそこらへん
のところに原因があるようだった。

「きみは今日のレース、どこで観戦するの？」と訊ねた。

「ぼくはラ・ツール・ド・キャロルからヒッチでできるかぎり上へいくつもりだ。エン
バリラ峠では素晴らしい闘いが繰り広げられるはずさ。きみはどうするの？」

「ぼくはラ・ツール・ド・キャロルからバスに乗り継いで直接ゴールのアンドラへい
くつもりだよ。」と答えと彼は、せっかく自転車を持っているのに輪行してしまう
の？もったいないなあ、としきりに残念がった。

ラ・ツール・ド・キャロルでドイツ青年と握手をして別れた後、アンドラ行きのバ
スに乗り込む。しかしドイツ青年に軽く言われたことがひっきりどうも心晴れな
い。外の天気は素晴らしく、次々に走り抜けて行くサイクリストはとても気持ちよさ
そう。バスはまだエンジンをかけないでいる。よし、決めた！私はバスを降りトラ
ンクから自転車を取り出し組み立て始めた。駅の売店でサンドイッチと水を買込み
いざ出発する。

走り出すと開放感が満ちてきて無性にうれしくなる。途中さっき別れたドイツ青年に
会った。

「おや？どうしたんだい。バスに乗るっていつていたのに。」

「気が変わったんだよ。ぼくはこの峠に挑戦してみたくなったんだ。」というと彼は
ニコリして

「ぼくもヒッチしようとしているんだけどなかなかつかまらなくてね。自転車のきみ
が羨ましいよ。」といった。

岩に3級、4級とあるように峠もその難易度（標高差・勾配による）によってグレード分けされている。比較的簡単な峠が4級、そして3、2、1級と難易度が上がり最難関に超級がある。そして峠を1～3着で通過したものにはカテゴリーに応じたポイントが与えられ、総計で最もポイントを稼いでいる選手が山岳王のしるし赤玉模様の「マイヨ・グランパール」とよばれるジャージを身にまとうことができる。これを着ることはたいへん名誉なことで、私も憧れる大好きなジャージだ。しかしこの赤玉ジャージより名誉なのが黄色の「マイヨ・ジョーヌ」と呼ばれるジャージだ。これはその時点での総合順位1位（総時間が最も少ない選手）が身につけるもので、「ツール・ド・フランス」とはたった1枚の黄色いジャージを奪うために繰り広げられる戦いなのだ。もう一つ、スプリントポイントを最も稼いだ選手には緑色の「マイヨ・ベール」が与えられる。もちろん、これらのジャージは最終日、パリ・シャンゼリゼの表彰台で着てこそ最も意味のあることなのだが、たった1日着るだけでも未来永劫まで歴史に残る。

私はカテゴリー2級のピュイモレン峠を登っていく。このピレネー越えのために筑波山のいくつもの峠を攻めまくり、ギヤもセッティングし直したのだ。だが背中荷が異常に重い。途中買い膨らんだ雑誌のせいだ。日本で手に入らない自転車雑誌をあれもこれもと大喜びして買ってしまったのを今更後悔してももう遅い。

「ウエイター、ウエイター（荷が重いよー）」と叫びながら登っていくと追い越していったサイクリストがペースを落とし引いてくれる。しばしば後の私を気遣うように振り向く。どうも（ウエイター＝待ってくれ）と間違えて通じてしまったようだ。しかし、あまりに私が遅いのでしばらくすると見捨てられてしまった。

それにしても峠に押し寄せる観衆の数はすごい。前日からテントを張って場所をとる人、家族でキャンピングカーでやってくる人、みんな楽しそうだ。私は「RMO」というフランスのチームのジャージを着ていた。今年はスポンサーが撤退してしまいチームは消滅してしまったが、それまで「シャリー・モテ」というフランスの英雄が長く在籍していた。だから途中何度も

「シャリー・モテ！シャリー・モテ！アレアレー！（＝いけいけー！の意）」と老若男女に声をかけられた。もちろんからかわれているのだが、この峠を登っているのだからオマエもチャンピオンだ！というわけである。

「メルシー！（ありがとう）」と手をあげて答えるとまた嬉しい声援が飛んでくる。こんなことはフランスでは日常茶飯だがまず日本では考えられない。罵声や減茶苦茶

なクラクションを鳴らされた経験は何度もあるが。マイペースでピュイモレン峠を通過、このあたりから雲中に入り気温もぐっと下がってきた。ダウンヒルの間、手が凍りそうだった。そして、カテゴリー1級のエンバレラ峠に向かう。しばらく登ると国境にたどり着いた。この先はアンドラ王国（スペイン）となる。警官が寄ってきて、パスポートをみせろとうるさい。ちえ、同じECのくせに！この先標高が上げればますます気温が下がるだろうし、手がかじかみパスポートを出すのが面倒になったこともあってアンドラに入るのはやめた。来た道を戻り、勾配のきつそうなところでツールを待ち受けることにした。

私はクロロファイバーの下着をはじめとして着れるものすべてを身につけたが、それでも寒くじっとしてられない。だが、横の子供が半ズボンでキャーキャー言っただけで遊んでいるのは一体なんなんだ。早くツールこないかなあと腿あげしながら待つこと2時間、ようやく霧中から姿を現した。先頭は山に強いフランス人リシャール・ピランクを含む3人だ。拍手と歓声の中、彼らはあっという間に通り過ぎ、そして断続的に数人が走り抜けていった。数分後、主集団が姿をみせた。先頭を気迫こもったフランス人ジャン・フランソワ・ベルナルが引く。彼をはじめ、先頭はスペインのバネストチームで占められている。まさにバネスト艦隊と形容するにふさわしい布陣といえる。彼らアススト陣が守るべきものはたったひとつ、エースのミゲール・インデュラインが着ているマイヨジョーヌだ。インデュラインは、ツール開始前から優勝候補No.1と呼ばれ、そしてすでにこの日までに総合優勝はほぼ間違いないものになっていた。もしこのインデュラインの王座を脅かすとすれば、それはもう山岳王の赤玉ジャージに身を包むクラスチームのスイス人、トニー・ロミンゲルしかない。彼は現在のところ総合4位の成績だが目下絶好調であり、唯一人、絶対王者インデュラインに対し反旗をひるがえしアタックを繰り返している。総合2位にコロンビア人のメヒア、3位にポーランド人のヤスクラがいるが彼らは決してアタックをしない。自分の身のほどを知っている彼らは無理なアタックで己を潰すようなまねをするよりも、あわよくばこのまま3位以内で終えシャンゼリゼで表彰台に上ることを夢見ているのだ。インデュラインが強すぎるため、彼に闘いを挑むところではなく自分の地位を守るのに必死である。彼らの敵は当面のところ、インデュラインよりも4位から這い上がろうとしているロミンゲルである。それぞれに思惑を秘めてツールは進む。

初めて身近を走り抜けるインデュラインにみとれるうち（彼は身長190cmの巨体で圧倒してしまう）、後続のアリオステアチームの選手だったか、寒さでいらなくなっ

たボトルを私に放り投げてくれた。ラッキー！中の水は飲み、ボトルは記念に持って帰ることにした。

峠を下るが、宿が2軒しかなく満員で断られる。さらに20kmほど走った街でようやく宿を確保できた。ホテルのおばさんは英語ができなかったが、そんなやりとりも楽しむ余裕がでてきた。

《7/20》

今日はツールの休養日だ。タルブ駅で降り、ベンチで今後の作戦を練っていると大きな青年に話しかけられた。

「きみもツールファンかい？」「そうだよ。」と答える。

「ぼくはアイルランドからきた。ステファン・ロッシュとショーン・ケリー（両者ともアイルランドが生んだ自転車界のスーパースター）の国だよ。」

「へえ、ぼくもロッシュとケリーは好きだけど『U2』（アイルランドのバンド）の歌も好きだよ。」と言った。すると彼は急いでもうひとり仲間を呼んできて教えた。

「おい、こいつU2のファンなんだってよ！」

そして2人は、今時そんな奴がいるのかよ？といわんばかりにゲラゲラ笑い、しょうがなく私も笑いはじめた。U2といったらアイルランドの大ヒーローだと思っていたが一部ではそうでもないらしい。しかし東洋人のU2ファンだというのがことのほか受けがたく、レキップ紙を見せてくれたり、「ぼくらはツールマレー峠の麓でキャンプしているんだけどよかったら一緒にこないかい。」と誘ってくれまでした。私はタルブの街で3連泊しようと思っていたので断り、「明日、サンラリー・スランで会おう！」と言って別れた。サンラリー・スランとは明日第16ステージのゴールに立ちふさがるカテゴリー1級の峠である。

《7/21》

今日はサンラリー・スランが目的地だがまずその前にアスパン峠を越えなければならない。今年のツールのコース（ツールは毎年コースが変わる）には組み込まれていないが、通常カテゴリー1級の難所である。

ツールのコースには熱心なファンによりロードペインティングがなされる。ひいきの選手を厳しい峠で励ますために路面にペンキで選手の名を書くのだ。そしてアスパン峠の登りの最中、おそらく'90ツールの名残であろう、『グレッグ・レモン』の名が薄

くなりながらも残されているのを見つけ悲しくなった。レモンは私が一番大好きなレーサーだ。もともと今年はレモンを応援するためだけにやってきたのだ。彼は力がなくなり今年が最後のツールになるだろう、といわれていた。ところが彼はすでにツールに出場すらできないほどボロボロだった。レモンは奇跡を起こしたライダーである。自転車レース不毛の地、アメリカからやってきて'86ツール制覇、絶頂期のオフシーズン狩猟の際義兄の放った（わざとではない）散弾銃で体内に50発の弾丸をくらってしまう。生死の境をさまよい一命はとりとめたもののレースではかつての面影はなく誰もがレモンは終わったと思った。そして'89ツールの大逆転劇である。最終日、シャンゼリゼでそれまでつけられていた50秒の差をひっくりかえしてしまったのだ。その差、わずかに8秒！3250km走り終えて1位と2位の差がたった8秒である。いかにこのときのレモンの勝利が衝撃的だったかということ、私の友だちをみればわかる。私が「グレッグ・レモン！」と呪文を唱えると彼は熱にうなされたように「はちびよう、はちびようさー」と不気味に繰り返すのである。その後レモンは'90ツールも優勝するがそれ以降年を追うごとに力がなくなってきた。奇跡は再度起こるのだろうか。

アspan峠に着き一服していると「おーい！」と遠くから呼ぶ声がする。みると昨日のアイリッシュ2人組が手を振っている。自然に、よし一緒にいこうぜ！ということになる。ダウンヒルが始まるやいなや2人は猛烈なスピードで飛ばし、あっという間に視界から消えた。俺は命が惜しいもんね、とマイペースでコーナーをクリアしていき、先をいきたいサイクリストには無抵抗でどンドン道を譲ってやった。しかしみんなガードレールも反射鏡もない中をすごい速さで下っていく。峠を下り終わると後からアイリッシュに肩をたたかれた。ずっと待っていてくれたようだ。平地に入ると自然と隊形が決まった。でかく一番強い大ちゃん（名を忘れた）が先頭を引きその後をロッシュ君、ラストは足がない私である。凶暴的なスピードで大ちゃんは引き続け私はただついていだけで精一杯だ。ロッシュ君がちぎれそうな私を心配そうに振り向く。

「暑くなったからここで上着を脱ぎたい！後から追いかけるから先に行って。」とたまらず叫ぶと、意外にも

「じゃあ待ってあげるよ。ここで脱いじゃいな。」と止まってくれた。そしてまた、情け無用のハイペースについていくことになった。

苦闘の末サン・ラリーに到着し、ついにカテゴリー1級の登りが始まった。見上げ

れば、「えー！まさかこれを登るんじゃないだろうな。」と最初から肝をつぶされる急坂だ。登りは個人のペースでいくことにした。大ちゃんは山にも強く華麗に登っていった。しかしロッシュ君は私より遅く「山では俺の方がつよいぜ！」とようやく自信を取り戻した。それにしてもカテゴリー超級にならないのはなにかの間違いじゃないか、と思えるほどきつい坂である。10%近い勾配が10kmにわたって続くのだ。そして6kmほども登ったろうか、クランクを回せなくなりついに自転車を降りてしまった。筑波で最もきつい、裏筑波にある10%の勾配が5km続く坂でよく練習したが5kmを越える峠は登りきることができなかった。バックからサンドイッチを取り出しぱくついていると数分後、ロッシュ君が通過していった。くやしさが起こらないほど力つきた状態だった。

道端には無数のバスクの旗で埋めつくされ、力強く翻っている。中にはフランス、スペイン、イタリア等も混じってはいるがバスクの旗が圧倒的多数を占めている。バスクは国を持たない民族だ。ケルト人と種を同じくしているらしくユニオンジャックの色違いで緑と赤の旗だ。アイルランドのIRAとともにバスクのETAは悪名高いテロ活動で知られている。しかしここにいる人々は純粋に自転車レースと彼らの英雄を愛してやまない。彼らの英雄とは現在無敵の王、ミゲール・インデュラインに他ならない。普段穏やかで誰も怒ったところをみたことがないといわれる彼だがバスク

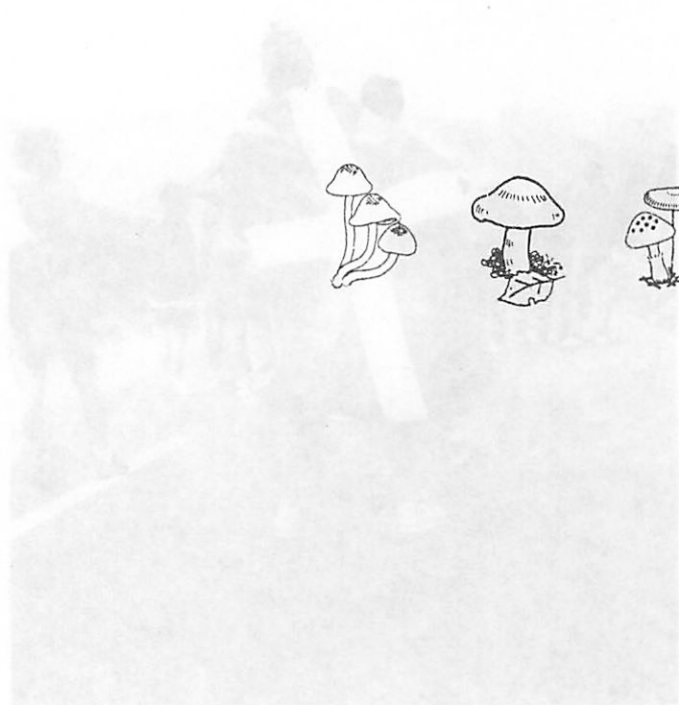


サン・ラリーのバスク人

人であることの誇りを走りで見せてくれる。

再び走り始め、勾配が緩みようやく頂上に着くと何万人という観衆が周囲の丘に埋める光景に出会い圧倒される。みんな今日の厳しいレースで今年のツール全体の決着がつくのを感じているのだ。この大観衆の中トップでやってくるのは一体誰なのだろう。ロミンゲルが独走でくれれば劇的だけど。

(庄司 記)



人々への一しそ・べせ

あ～まぼろしの足尾沢

1993. 7. 31～8. 1 (第一回)

パーティ L 本図一統、生井一男、古山正文

前々から行ってみたかった沢の一つ、足尾沢に行く機会を得た。数年前の崖崩れのため、通行止になっていた清津峡の遊歩道が昨日開通したのだ。この情報は湯沢町に時々電話を入れて確認しておいた。あまりしょっちゅう電話をするので、開通を少し早めることができたかな？いや、そんなことはない。予定通りの開通だったにちがいない。開通したといっても遊歩道ではなく登山道で、一般の観光客が通れるほどの良い道ではない。さらにルートは八木沢から足尾沢橋までは同じだが、そこから清津峡温泉までが大幅に変更され、尾根筋に道が作られた。そのため観光の目玉になっていた柱状節理の見事なV字峡の部分は見ることができない。計画では（工事が始まっているかもしれない）ここにトンネルを掘り、所々に穴をあけ、見学できるようにするという。しかしながら、思い込みというものは恐ろしいもので、私は鹿飛橋も足尾沢橋も地形からいって吊橋だとばかり思っていた。前から湯沢町役場に電話するたびに“八木沢から入れば崖崩れの現場は通らないのだから、入溪してもいいでしょう”と交渉すると、決まって“鹿飛橋のはめ板をはずしてあるので、通行不可能です。それに環境庁から人を絶対入れるな、と、きつく言われているのです”という答えだった。私も吊橋の板がないんでは通れないだろうとあきらめていた。しかし、実際は鉄骨造りのしっかりしたものだ。板がなくても通行できたのだ。地元の釣師で入っていた人もいたのだ。

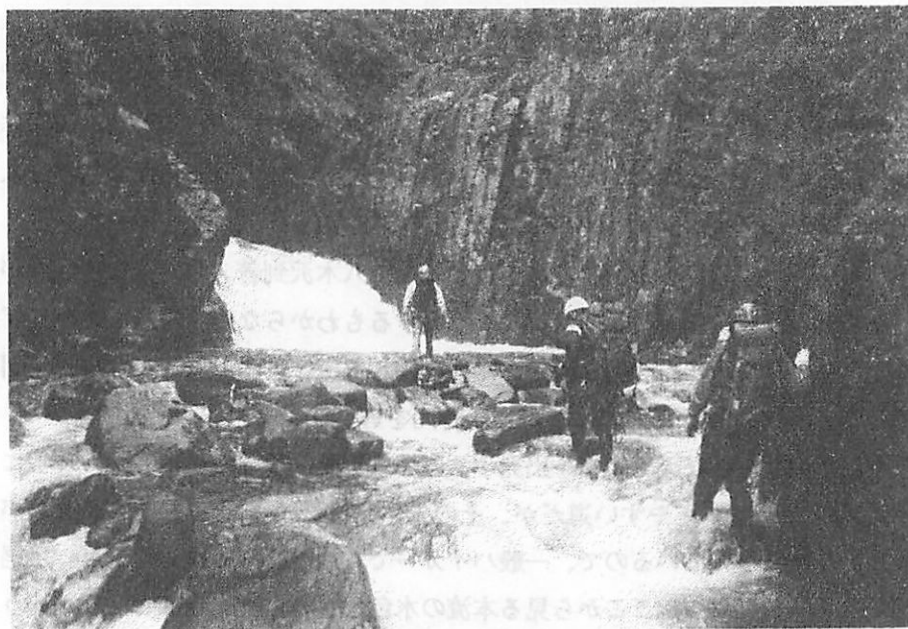
30日夜、下山用の自転車を林道にデポした後、八木沢到着。りっぱな案内板があるが、その先の道を確認してから仮眠しようとするもわからない。結局1時間ほど探したが見つからなかった。翌朝見るとあんなに探した道は目の前にあったのだ。明るければなんということはないのに、むだな時間を過ごしたものだ。

すぐにも雨がきそうな天気の中を出発するのは気が重い。「熊に注意」の看板にドキッ。鹿飛橋までは歩きやすい道だが、その先、足尾沢橋まではアップダウンがある。けっこう整備されているので、一般ハイカーでも迷う心配はなさそうだ。足尾沢橋の下で遡行準備をする。ここから見る本流の水色と足尾沢の水色はぜんぜん違う。増水のためではなく、上流の雪溪の状態が悪いことが予想される。

遡行開始するとすぐに右折する。そこには10 m位の滝があり、直登はできず右岸を巻くが、見た目より脆くていやらしく時間をくう。ここは左岸を巻くべきだった。ここからは狭いゴルジュの中を奔流となって流れ下る水を押し分ける様に前進する。次の3 mは空身で右壁を登る。ここで、もうスノーブリッジがでてくる。まさに崩壊進行形でドカン、ポコン、ベチャンなど心臓にはまことによろしくない。これを下から上から何とかやり過ごす（前から後ろからではありませんぞ。これまた失礼）。続く3 mナメを登ると、スノーブリッジも手につけられないほど悪くなる。それでもなんとか7 m直瀑まで行く。ここは直登以外にルートはない。今、自分がいるのは崩れたブロックの上、高い所にもスノーブリッジがあり、中はライトがほしい位暗い。釜に飛び込んで直登しても、落口がスノーブリッジの屋根でふさがれているので、それ以上進めない。安全地帯まで少し戻り、検討した結果、高巻きしても、そうとうの大高巻きになり、時間切れになってしまうだろうから再度アタックしたほうがよいということになり、撤退と決まる。出合でちょっと糸を垂らしてみたら数尾の岩魚が釣れた。刺し身にして食べ、元気のでたところで帰路につく。

八木沢（5：25）―鹿飛橋（6：25）―高石沢（6：50）

―足尾沢（7：35～8：05）



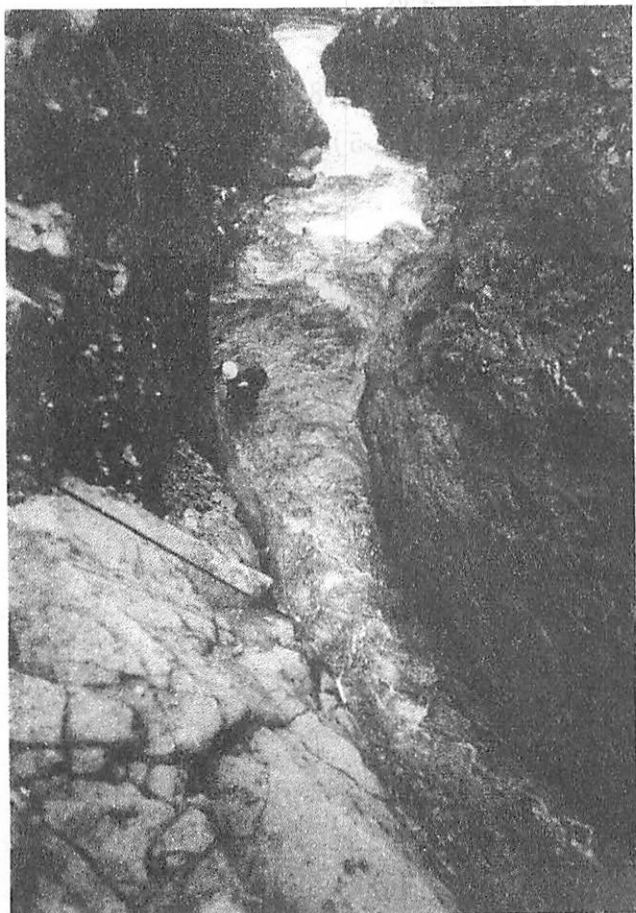
3 m ナメ滝に行く（9月8日の写真）

1993. 9. 11~12 (第2回)

パーティ L 本図一統、生井一男、佐藤文則、古山正文

八木沢で寝ていると釣人がきて薄暗いうち出発していった。我々もゆっくり起き出し、でかける。夜半降り出した雨は今も降り続けている。時々強く降るので増水が心配だ。足尾沢に着くと、今朝の釣人達がいて、もう釣りは終わっていた。みると尺上ばかり10数尾。大きいのは38cmとか。出合からF1までの100mぐらいの間で釣ったのだ。こんなことをされては困る。私の釣る分がなくなってしまうではないか。一言文句を言っておこうとしたが、よく考えてみれば、ここの岩魚は自分のものではないんだっけ。そういえば7月に来た時もそうだったけど、今日も本流と足尾沢

の水色が違う。足尾沢の水色はいつもこんなのかな。



幅2mのゴルジュに行く

最初の滝は左岸を巻き、3mナメまでは同じルートで行く。7m直瀑は右壁直登。残置ボルトとハーケンがあった。すると、またまたでしたスノーブリッジ。でも7月のような暴れものではなく、おとなしい双子のSBちゃんだ。急いで駆け抜ける。2段25mは左壁を登る。少し行くと2段40m大滝が見えてくる。実際は40mより大きいのではないだろうか。日数があればぜひ直登したいと思う美しい滝である。ここでアクシデントが発生。河原を歩いているうち佐藤

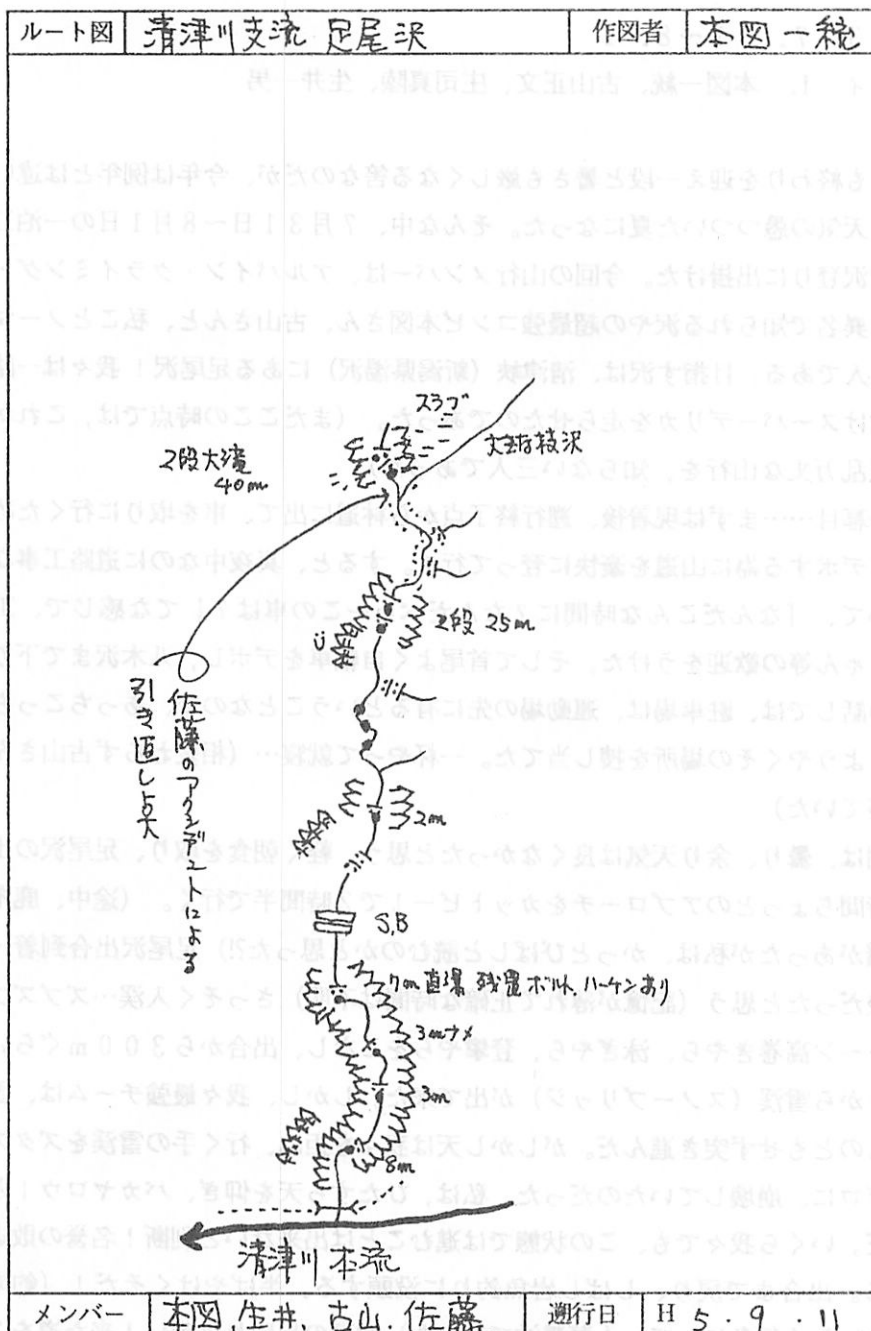
が大岩でスリップ、落ちてしまったのだ。“佐藤”と呼んでみるが返事がない。意識がもうろうとしているようだ。水の中から引き上げ平な所に寝かせる。頭から真っ逆さまに落ちたらしい。ヘルメットをかぶっていたので頭は大丈夫だが、どうやら首を痛めてしまったらしい。左手もみるみるうちに腫れてきた。でも症状から骨折はないと思われる。おそらく首は鞭打ち、手は打撲であろう。しかし登攀続行は無理なので、なんとか明るいうちに安全地帯まで降ろさねばならない。幸い歩けるので佐藤を空身にし、生井と古山を付き添わせて私はルート工作のため先行する。登ったルートは下降用に使えないことが多いので、地形を確かめハーケンを打って懸垂支点を作っていく。思ったより順調に降りられ、出合には明るいうちに着いた。鹿飛橋からはヘッドランプをつけ、八木沢に8:30頃到着。

足尾沢はまた来年こよう。あーまぼろしの足尾沢

八木沢(6:35)ー鹿飛橋(7:40)ー高石沢(8:05)ー
鼻(8:30)ー足尾沢出合(8:45~9:15)ー大滝下(12:30)
(本図 記)



7 m直瀑の直登



無念の足尾沢から奥竜神取材廻行&御岩山ゲレンデへ

1993. 7. 31~8. 1

パーティ L 本図一統、古山正文、庄司真陸、生井一男

7月も終わりを迎え一段と暑さも厳しくなる筈なのだが、今年は例年とは違い、雨の多い天気の影響で夏になった。そんな中、7月31日~8月1日の一泊二日の予定で沢登りに出掛けた。今回の山行メンバーは、アルパイン・クライミング・スイマーの異名で知られる沢やの超最強コンビ本図さん、古山さんと、私ことノーマル生井の三人である。目指す沢は、清津峡（新潟県湯沢）にある足尾沢！我々は一路足尾沢に向けスーパーデリカを走らせたのであった。（まだこの時点では、これから始まる波乱万丈な山行を、知らない三人であった）

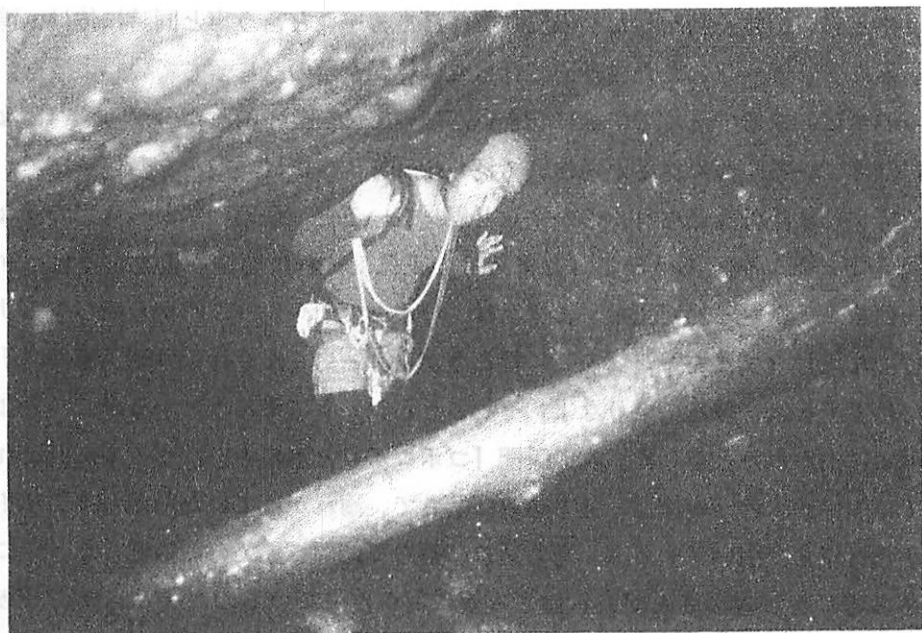
第一幕目……まずは現着後、廻行終了点から林道に出て、車を取りに行くための自転車車をデポする為に山道を豪快に登って行く。すると、真夜中なのに道路工事なんかしていて、『なんだこんな時間に？なんだペヤ〜この車は？』てな感じで、工事のおっちゃん等の歓迎をうけた。そして首尾よく自転車をデポし、八木沢まで下りる。某氏の話しでは、駐車場は、運動場の先に有ることなので、あっちこっち翻弄して、ようやくその場所を捜し当てた。一杯やって就寝…（相変わらず古山さんは、外で寝ていた）

翌朝は、曇り、余り天気は良くなかったと思う。軽く朝食を取り、足尾沢の出合まで3時間ちょっとのアプローチをカットビー！で2時間半で行く。（途中、鹿飛橋という橋があったが私は、かっとびばしと読むのかと思った?!）足尾沢出合到着…10時前後だったと思う（記憶が薄れて正確な時間は不明）さっそく入渓…ズブズブズブバシャーン高巻きやら、泳ぎやら、登攀やらをこなし、出合から300mぐらい入った辺りから雪渓（スノーブリッジ）が出て来た。しかし、我々最強チームは、雪渓なんかものともせず突き進んだ。がしかし天は我々を拒み、行く手の雪渓をズタズタのボロボロに、崩壊していたのだった。私は、ひたすら天を仰ぎ、バカヤロウ！と心で叫んだ。いくら我々でも、この状態では進むことは出来ないと判断！名誉の敗退を決意する。出合まで戻り、しばし岩魚釣りに没頭する。半ばやけくそだ！（釣果…4匹、おいしく刺身にして、人蔘醤油で戴いた）敗退の足取りは重い！来た道を3時間掛けて戻るのか、と思うとうんざりする。古山さんの台詞を借りると『もう！やん

なってくるなあもう！やだやだ』である。仕方がないけど、折角ここまで来たのにと
思っていると、変わり身の早い本図さんにひらめきが浮かんた様で、『どうせだか
ら、岳人原稿依頼の取材に行くべ〜奥竜神にいくべ〜なあそうすっぺ、茨城の方が天
気はいいからな、佐藤と庄司も誘ってくべよ』てな訳で、我々最強チームは、とんぼ
帰りで一路茨城に戻った。早速、佐藤、庄司に電話で連絡し、結局、庄司はOK！佐
藤はダメ！で千代田の役場11時集合に決まる。

第二幕目…千代田役場に11時に集まり、本図、古山、庄司、生井の4人で奥竜神
遡行に出掛けた。（デリカ&ビスタの2台で行く）途中、常陸太田で、食糧を調達す
るのにコンビニを探すが無い！無い！無あ〜い！『そんな訳ね〜べよ、コンビニくら
いあるべよ』と某氏…そんなこんなで那珂町まで戻り、ようやく食糧を調達し、目指
すは奥竜神！まずは、武生神社の駐車場に車を停め、また恒例の酒盛り一杯、そして
就寝…（ここでも古山さんは、外でグウグウ寝ていた）

翌朝7：00起床（記憶では、大分過ぎていたと思うが？）天気は、足尾沢とは
打って変わって快晴、沢のぼりにはうってつけの日になった。朝飯を済ませ、まずは
遡行終了点から、ここ武生神社に戻って来る為に、何と私の超高級スーパービスタ



大岩のトンネルにて、庄司

を、林道にデポするとの事?! ええーまあーいいやと思いながらスーパーデリカと連れ立って、本図仙人の後をついて行く。仙人の指示する場所に車をデポし(木に、草鞋がかかっていて、ここが沢から上がって来られる所だとの印みたいだった所に)、スーパーデリカで神社に戻り、身支度を沢着に着替え、ここから歩いて行く。入溪地点の亀が淵には、30分位で降りられた。この淵はなかなか大きい淵であり、いきなり泳ぎが入るところだ。私は、一人わくわくしていた。ここでガチャとか付けて準備していると、小学生の遠足だろうか? 子供数十名と引率の先生らしき人がゾロゾロやって来て、なにやら賑わってきた。多くのギャラリーの見守る中、誰がトップで行くのかな? 思っていたらザイルの末端が回り回って私の所へ…アレレのレ、やっぱり俺なの?! 『しゃないなあ! それじゃ俺の華麗な泳ぎを、みんなに見せてあげましょうネ』では、ハーネスにザイルを付け、深呼吸ひとつした後、バッシューンとダイビング、まずは平泳ぎ、そしてクロール、最後はバタフライで滝の落ち込みに着く。そして滝の右岸の壁をへつりながら攀じ登る。水に濡れた体は、水から出るときは重く感じて、背中に何か取り付いたみたいだ。また滝では、水が体にかかるし、ホールドはきかないしで、なかなかシビアなもんだ。もうすこしで乗っ越せるかなとじわじわと体を伸ばす。ふと左岸の方に目をやると、そっちの方が楽に見えたので、戻ろうかと思って体を動かしたその反動で、『あぁー』と言う声と同時に体は、滝の落ち込みにドッポーンとたたき落ちて行った。体が奈落の底に落ちていくようだ。落ち込みの中は、まるで洗濯機のように巻き込んでいて、自分の位置が分からない、なおも体は沈んでいる。段々意識が遠のいて行く…『あぁ、俺は、こんな若い身空で、何も知らずに、仏陀のもとへ行くのか?』と思っていると、奈落の闇から人影の様なものが見えて来た。夢だろうか? 『おまえは、正二! それに博美、貴志、それにターコ、…何故ここにいるんだ正二、おまえは、バイクで……』『これから俺らツーリングに行くんだ』『またキャンプをしに行こうよ』『一男さんも行こうぜ、俺のバイクに乗っけてやるよ、後ろに乗りなよ』それじゃとシートに乗ろうとするが、いきなり体が何かに引かれたと感じた。次の瞬間『ゴボゴボ』と水の中を、ザイルに引かれて居るでは無いか? そうか俺は、落ち込みに落ちて、溺れかけていたんだっけ? ザイルに体を任せ岸まで引いてもらう。落ち込みに落ちて幻想を見ていた様だった。岸に着いて落ち着くと、本図さんが、古山さん等に何か言っているのが聞こえた。『あのな! いいか、滝の落ち込みに落ちたら、すぐに一気に引き寄せなくちゃだめだぞ、水に巻かれて泳げ無くなるから、溺れちゃうからな! 死んじゃうぞ』てな事を言ってい

たと思う。そして選手交替で、今度は『平成の加藤文太郎』こと古山大先生がアタックする。俺とは違い、左岸から行って難無く上がって行く。ありゃりゃ！（少しは私の立場も考えて欲しいと、心の中で思った）次ぎに、本図さん、庄司、そして最後に私、ザイルに引かれて行くのは、楽々で楽しい。その後は、殆ど水線通し行け、多少泳いだりへつったりしていく。もう終わりかなと思わせる河原になったかと思うと、また淵やら滝が出て来た。そんな事を何回か繰り返した。途中で、5 m位の流木が2本、岩に引っ掛かっていて、私は、流木の上をトントンと渡り岩の上に出たのだけど、庄司も同じ様について来ていたので、振り向き様に『滑るから気をつけろ』と言おうかと思った瞬間に、彼の姿が目前から消えた！慌てて覗き込むと、流木にぶらさがっている。後から来ていた古山さんが、サポートして難なきを得た。回りの心配をよそに、本人は案外けろっとしていた。その後も、ダラダラで、何か長〜く感じた。『早く終了点につかないかなもう！』古山さん曰く『まるで、ボディブローをくらっている様で、じわじわきいてくるなあ』うまい事言うな『座布団！一枚』に値する表現だ。時間的には、十分来たなあと思っていると、右岸に小さな石垣の様な物がありここで本図仙人が眼力を十分に発揮して、ルートファインディングを披露しようとしていた。仙人いわく、『ちょっと待て、今、車にピッタリ出るルートを



竜神槍

探す。もしピッタリ車の所へ出たら、ビール1本?いや!ビール2本なビール2本だかな。どうも仙人は、賭けが、お好きなようで、いやあ!参ったもんだあ。左岸の踏跡をたどっていく。思ったより登りが長い。長いナ〜とひたすら登ってようやく武生林道に到着。見ると、私の超高級スーパービスタが、あ〜るじゃありませんか!? 何と林道に出た所と言っても良い所に!仙人には頭が下がります。『お見それ致しました仙人様。はっは〜あ!』と3人ともひざまずいたのだった。そして濡れた衣類を乾いた物に着替えるが、しかし何という失敗か私と庄司は、着替えを忘れてしまって、庄司は上半身裸、そして私は、逆に下半身パンツ一枚の姿で、武生神社まで超高級スーパービスタで戻った。(古山さんには、変態の様に言われた)武生神社に戻り、普通はここで終わりになるのだが、波乱万丈な山行は、まだ々続く。次は、お岩山ゲレンデにて登攀写真を撮るために車を走らせた。大変だなもう。お岩山に着き、本図、古山、生井の3人で取材に行く。庄司はというと、ヨーロッパ帰りで疲れているのか、車で待機していた。御岩山ゲレンデで、私がトップで古山さんがセカンドにて登っている所を4〜5枚撮影し、終わりにして帰る為に我々は懸垂下降した。この時に私は、古山さんのもう一つの特技を目にする。何と岩角に架けたシュリングをザイルアクションで回収してしまったのだ。これを私は、古山マジックと呼ぶ事にする。そして2時間ぐらいの撮影を終えて帰って来ると、庄司は車でグウグウ寝ていた。無事全行程終了して一路千代田役場を目指し帰途についた。

PS…今回の波乱万丈の山行に、匹敵する庄司大先生(うちは、海外に行った人を大先生と呼ぶ)のヨーロッパ紀行を帰る道すがら聞いたが、大変だったようだ。興味のある人は、聞いてやって下さい。又この取材は、10月号の岳人に載りました。では、どこかでまた会いましょう。

武生林道(9:30)ー亀が淵(10:00~10:15)ー竜神槍(13:15)ー
廻行打ち切り地点(15:10)ー武生林道(15:20)

(生井 記)



息子と登った白馬岳

1993. 8. 4~6

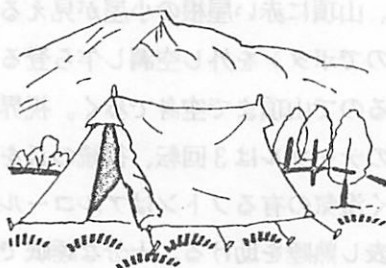
パーティ 鈴木操 他一名

朝霧の中を白馬尻小屋まで緑濃い林道を歩きだす。今年の気候は冷夏。少しの暑さを感じない。前日の睡眠不足が歩調を遅くし、息子との会話も少なく、今日の天気のように重苦しい。視野も狭く湿度が高い。白馬山荘へ泊まる初日は余裕があるので、2台のカメラが胸で揺れている。大雪渓が目前に見える白馬尻小屋は熟年ハイカーで賑わい、カラフルな雨具が目につく。薄紅色の染料が雪渓にあり、コースを強制し、マイペースの歩きが制約される。蟻の行列のごとく一列縦隊で蛇行しながら登る。カラフルな登山者が絵になり、カメラの出番が多くなる。今日は息子がボッカ役で、3台のカメラと三脚、フィルムも多めに用意し、撮影を目的とし温泉もプラスしている。私は30年ぶりの大雪渓に酔い、シャッターを押すのだが、天気が今イチで残念！登山はなんといっても晴天でなければ！レインジャーの姿が見えると花畑が広がり、注意とレクチャーが足を止める。昔は花に囲まれ大の字になり極楽とはこんな風景か？イメージしたものでアル。今は山中でも管理社会なのだ。モラルと言ってしまえばソレまでだが、何か割り切れないのは私だけであろうか？昔は山ヤの特権で有った世界が狭くなってしまった。霧が晴れると左右の斜面に黄色と白を主体の高山植物、お花畑の出現でシャッターを切る音が周囲に聞こえ出す。冷夏のせいで開花も遅く30年前よりも規模が小さく感じる。風に揺れる小さな花はカメラマン泣せでテクニックを要し、息子を助手に風を遮る作業が楽しい？？息子との会話も自然と多くなり親子の疎通が密になる。山頂に赤い屋根の小屋が見える頃はポツリと雨が降り出し雨具を着用するが、暑いのでボタンを外し空調し乍ら登る。山頂小屋で宿泊の手続きをし、夕食まで時間が有るので山頂まで空身で歩く。視界が悪く早々に戻り料金以下のディナーを待つ。満席のテーブルは3回転、後続の目を気にし乍ら早食いとなり2畳に3人が寝る。ムシ暑く湿気の有るフutonはアルコールの勢いで寝るしかない。登る一方の大雪渓が疲れを表し熟睡を助ける。十分な睡眠で体調を回復し2杯のメシを食う。空腹は最大の調味料なのだ。天候が良くない予報で朝日岳のコースを断念し、三国境から白馬大池への蓮華温泉に変更する。余裕が有るので山頂では太陽の出るまで待ちシャッターチャンスを待つ。今日一日は晴天に近い予報を信じ3台のカメラを

ブラ下げて歩くサマは周囲の目を引き自然と顔がプロめき、危険な場所のアングルが多くなる。ヤレ、ヤレ、息子はモデル、助手、カメラマンの三役でカエルの子に変身！連れて来たカイ有り、私はニンマリ。今までに剱岳や穂高岳、冬の八ヶ岳、宝剣岳と一応3000m級の山々を2人で歩き、岩登りも一の倉沢で南稜をトップで登った経歴を持っている。お花畑と湿原の今回は顔が違う、どこかユルんでいる。下り一方のコースが足を早め、大池に着くころは天気が怪しくなり、ガスが水面を這い幻想的な世界が作られた。大池山荘は思ったより古く、収容人員も少ない造作で今風でない。通過位置に有る山小屋の宿命であろうか？サテこれからは一気に蓮華温泉まで下るのだが天気との競走でも有り、足の長い？二人はイダテン走りで急ぐ。2時間の早足はヒザが笑ってしまい、早々に温泉に飛び込む。余りほめられる浴槽で無くギャル様もいない、残念！女子プロが別なのでアル。今回は途中の薬師の湯が混浴と聞いたので女子会員を誘ってみよう。平岩駅までバスに揺られ1時間、白馬駅まで電車と乗り継いで小雨の中を愛車の待つ猿倉までタクシー。これで今夜の宿は白馬ペンションのコースで終了となる。予約を入れないと危ない時間なのでトライされる皆様は心して下さい。

猿倉口で車中泊。白馬山荘1泊。白馬荘ペンション1泊。合計3泊4日の親子登山は息子に何らかのプラス要素を期待している今日この頃です。

(鈴木 記)



ああ我が夏休みよ～飯豊連峰縦走

1993. 8. 4～6

中居 康展（単独）

8月にはいって、やっと初めての休みをもらえた。それまでは休日祝日の区別なく毎日のように病院で働く日々であったからその解放感ときたら、といきたいところだが前日まで休みのために残った仕事をかたずけていたせいで、心身ともにぼろぼろであった。

さて1週間ポケベル無しの生活がおくれるのだから、と以前より古山さんと黒部上の廊下廻行を計画していたが、連絡不足と気象条件に阻まれ、せっかくの休みを2日間無為に過ごしてしまった。ともかくこの休みの間に山に行かないことには発狂してしまう、というところで頭に浮かんだのは飯豊連峰であった。なんといってもこの梅雨前線の停滞でアルプス関係は駄目っぽい。それなら北だ、さらに行ったことのない飯豊連峰ならば縦走でもいいだろう、とあっというまに登山計画が出来上がり、3日



梶川尾根にて

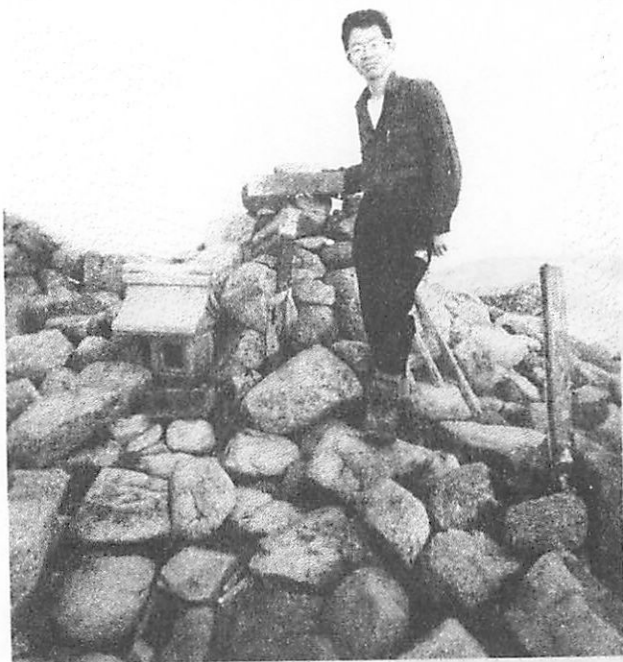
の午後、計画をたててから3時間後には我が愛車ジムニーは北へと向かっていった。

一人で東北道を運転するのもなかなか辛いものがあり、450kmを走破して飯豊山荘前に到着したときは明日からの登山を思うと憂鬱なものがあった。天気は高曇、雨は福島あたりで上がってこっちでは何とか降られずに済みそうだ。翌日の好天を願いつつ窮屈な車のなかで横になった。

テント一式、ビールにつまみ少々のはいったザックは久し振りのなまった体には重すぎるほどだった。梶川尾根の急登をひいひい言いながら登っていたが、途中で雨が降り出して気分は最低である。ところが森林限界を越えるところからガスが急に切れはじめて青空が見えだしたではないか。何という爽快感、まさにこのうきうきした気

分を味わうために俺はここまで来たんだ。この3ヵ月間の疲労をぶっとばすような、最高の気分である。稜線に出るとまたガスの中になったが、派手に雨に降られることもなく（梅花皮）小屋に到着する。昼間からビールをかつくらいながら昼寝する、最高の休暇である。

翌日はひたすら稜線をたどる。お花畑と豊富な雪渓、ガスは少々多いものの素晴らしい山旅である。大日岳を經由して飯豊本山に到着する。時間は昼をまわったばかりで、のんびり昼寝する。唯一の誤算はこの小屋ではビールを売っていないことで、暇にまかせて残りの食料をむさぼり食った。実は誤算はもう一つあった。これは下山してから



飯豊本山にて

気付いたのだが、この飯豊連峰の最高峰は本山ではなくまた別にあったのである。この調子ではもう二度と登ることはあるまいと考えると少々悔しいものがある。

翌日の天気予報は曇りのち雨。飯豊山荘までひたすら下りである。意外に天気は高曇で入山して以来最も視界がきいた。この下りがまた曲者で果てしなくアップダウンが続き、おまけに道は登山者が少ないせいか結構荒れている。下りのコースタイムだけで6時間であるからなかなかのものである。天候は下山まで何とか持ってくれた。車にのって近くの国民宿舎にある露天風呂にビール片手につかる。天気はぱっとしなかったが首はお湯につかれないほど日に焼けていた。ともかく（帰りの450kmを考えなければ）最高の休暇である。

久し振りの山行で改めて自分にとって山ってずいぶん大事な位置を占めてたんだなあなどと思ってしまった。全くなんて仕事についてしまったんだろう。まあ時間を見つけて、ついでにトレーニングもきっちりして、この冬はどこかのバリエーションルートでも行きたいなーなんて思いました。

P. S. A C C - Jで海外遠征に行く時には是非声かけてください。仕事とヒマラヤならどっち取るかは決まっていますから。

(中居 記)



夏合宿 黒部川上ノ廊下 遡行

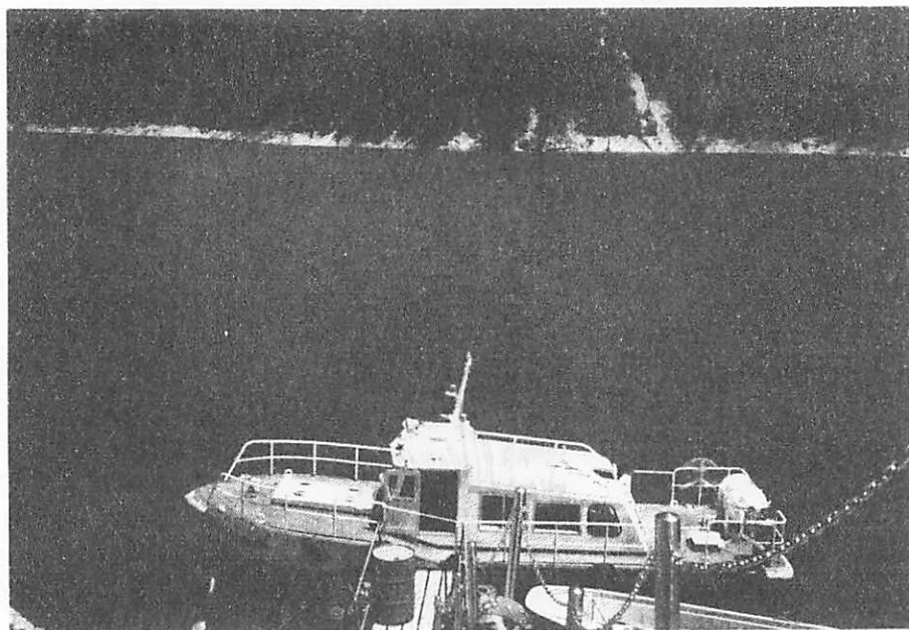
1993. 8. 12～16

パーティ L 本図一統、生井一男、古山正文、佐藤文則

今までは合宿と言えば、どこかにBCを張り、ルートは何本か登ると言うのがイメージだった。しかし、今年は本図さんの野望、我々の野望第二弾と言うことで新潟県黒又ダムに流れる沢の遡行を目指したが、船外機の故障で断念することになった。準備の良い本図さんにしては珍しい事もあるもんだと思いながらも、上ノ廊下という響きに心を躍らせてしまった。

そう、今年の夏合宿は上ノ廊下遡行である。あの上ノ廊下である。いつかは行って見たいと思ってはいたが、本図さんの趣味ではないらしく、以前に話した時はそんなに乗り気ではなかったのだが、準備期間がないということで今回資料の入手し易い上ノ廊下に行くことになった。

今回の最初の仕事は食糧減らしである。ベースまで徒歩5分を前提にたんまり買い



平の渡し

込んだものだからたまらない、本図さんにさんざん笑われ、呆れられながら食糧を本図邸にて整理する。終わってみるとその大半は残すという前代未聞の事態となった。しかし、色々と説明(言い訳)をしている内にM氏も乗り気になり2、3の品が付け加えられた。M氏も嫌いではなかったらしい。

そんなこんなで、アイスコーヒーをごちそうになった後出発。下館の市民病院に車を止め、扇沢を目指す。途中前橋まで本図氏のご子息が同乗されたが、とにかく眠そうで気の毒だった、彼を降ろした後、関越道、開通したばかりの上信越道を通りかなり早いペースで佐久に出る。後は、途中先導車よろしく道案内の車があったこともあり、いつもの道で扇沢に着く。5時30分頃には着いたのだが既に駐車場は一杯で路駐となる。飯を食って切符売り場を見に行くともう人が並んでおり、あわてて交代で列に並ぶことにする。無事7時30分の始発の切符が取れ、黒部ダムには8時に着き、平の小屋を目指して出発する。昨日の慌ただしさもう忘れ、いよいよ山行の始まりである。小屋までは快調に進み、暑さに誘われるようにビールを飲み昼寝をして船を待つ。思っていたよりはるかに立派な船で、あっという間に対岸に着いた。どうやって船を止めるのかと思ったら、岸にぶつけて止めるので驚いた。次に奥黒部ヒュッテを目指し進むが、他の3人が快調なのに比べ、運動不足のたたった佐藤

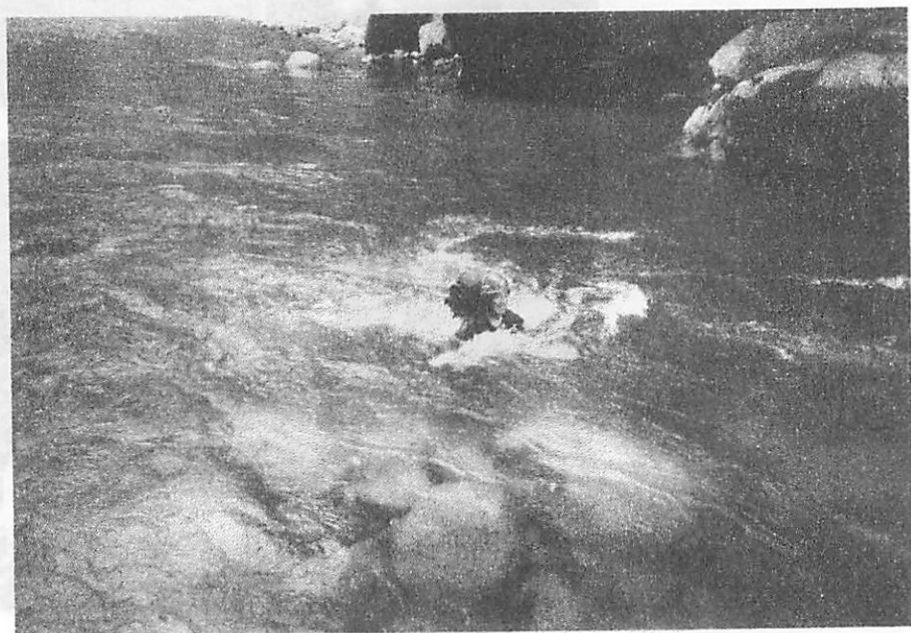


奥黒部ヒュッテにて
古山、本図、佐藤

は左右の足がつり、大幅に遅れる。奥黒部ヒュッテで2日分のビールを買い込み入溪する。風邪の直後で頭が痛いと言う佐藤の主張は認められず、やっぱりかと思いながら準備する。

今回、本図さんと古山さんは新兵器のネオプレーン地のウェットタイツを着込んでいる。佐藤もそれなりに新兵器のナイロン地の水切れの良いズボンをはく。さあ、いざ入溪と意気込むがなにしろ水が冷たい。最初の徒渉で本図さんが写真を撮るから待てと言うが、我慢できずに渡りきってしまう。今までのどんな沢の水よりも冷たい気がする。今日は少し入った所で野営である。天気がいいのでツエルトを被っただけで寝る。人工衛星捜しの競争をするが、いつしか皆眠りについたようである。

2日目は朝からいい天気である。まずは第一関門、下ノ黒ビンガをクリアー。水量の多い徒渉に苦労しながらも、黒い岩壁と青い空を見上げながら先を急ぐ。今までは丹沢ぐらいしか沢の経験がない佐藤は”水”の威力をいまさらながらに感じる。泳ぐのも一苦労である。トップが徒渉した後、まずザックをザイルで渡し、ザイルで確保されながら泳ぎ渡る。大体は本図さんがトップで泳ぐ。その次に古山さんが多い。この新潟生まれの熊さんは、なかなか泳ぎが上手い、しかしその割にはルート選びは苦



下の黒ビンガを泳ぐ生井

手なようで、とんでもない浅瀬でも溺れてしまうのが欠点だ。それに劣らず生井さんも泳ぎは上手い。胸から上をニョキッと出して泳ぐ様はユーモラスで、まるでマリオブラザーズに出てくる亀のようである。

さて、その泳ぎの達人たちを差し置いて佐藤がトップを泳いでみるようになった。右岸の少し高い所に登り、流心の向こうを目指して飛び、流れを横切るように泳いだ、つもりだったが流されていたけらしく石を抱えようとした瞬間にザイルで引き戻された。次に生井さんが挑戦するが、惜しくも体の向きが悪く立とうとした時に流されてしまった。仕方ないので高巻をするが、とんでもない大高巻で2時間も係ってしまった。ようやく河原に降りるとなんと後続のパーティはスクラムを組んで徒渉して行くではないか、やられた。見ていると、すぐ上流の釜で彼らは引き返してきて、対岸に渡り高巻いて行く。我々も釜に挑戦するが流れが速くとても泳げず、高巻をする。ここが、口元ノタル沢出合いである。しばらくはまた水量の多い徒渉を繰り返す。この辺りは遡行図ではゴルジュになっているのだが、かなり開けており沢の規模の大きさが分かる。

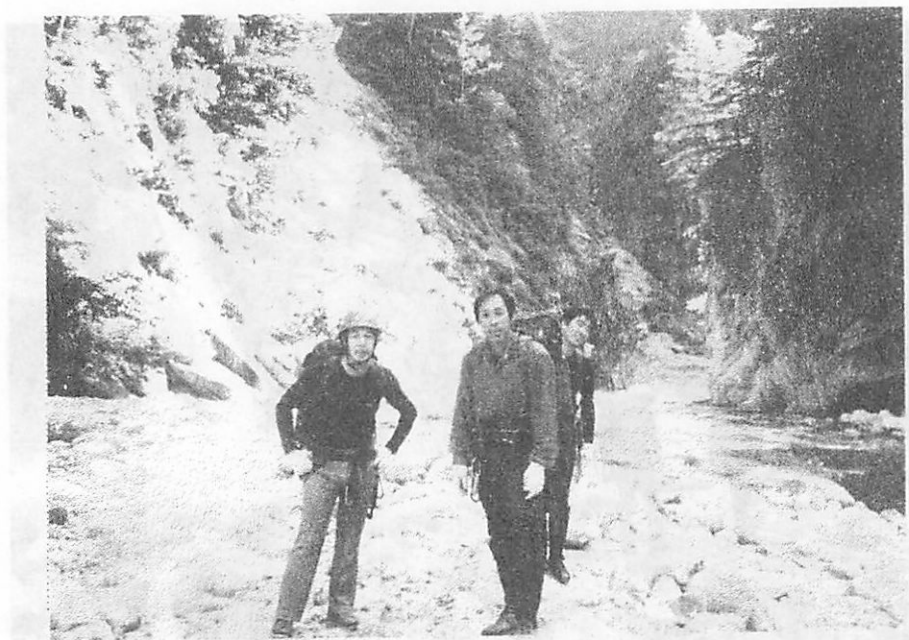
しばらく行くと広い河原に出るが、今度は河原がつづき浅瀬の徒渉を楽しむ。再び



上の黒ビンガ上の美しい滝に行く

沢が狭くなってくると上ノ黒ビンガはすぐそこである。このころから雨がポツリポツリと降り出すが、すぐに止む。シュリングに導かれるようにへつり、何事もなく通過、左岸に滝を見た後、キャンプに適する台地を確認して先へ行く。金作谷を過ぎ、ゴルジュ帯が終わるころその左岸に大きな台地を発見する。今夜のキャンプ地とする。ツェルトを張った後、薪を取りに行くと、思いの外大量に取れ大喜びで焚き火を囲み、食事にする。残念ながらまだイワナは食べられない。明日は、薬師の上に出るからきっとイワナが食べられると思いながら寝ようとした頃雨が強く降り出してしまった。

3日目の朝、目を覚ますと沢は増水し、大きな音を立てて岩が流れる濁流と化している。今日は停滞と決定。ゆっくりと寝、食べ、飲み、それでも暇で大トランプ大会を開く。昼前には雨も上がり、本図さんが竿を入れると早速1匹かかる。惜しくも取り入れ損ねたが、がぜんやる気を出し、すぐに釣り上げる。これがまた大きいのである。尺上クラスなのである、これは本図さんの大いに自慢する所となる。今後山行中10回は同じ話を聞く事であろう。「おめえ、アン時よ、ほれ黒部、黒部ん時は尺上のイワナをよっ、バンバン釣っちゃったんだから。」というふうに。

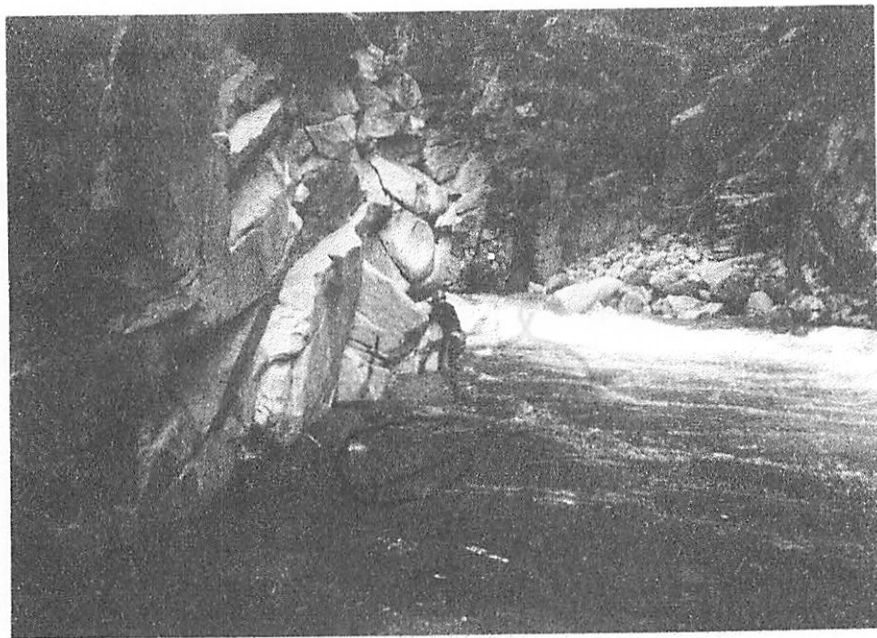


河原でほっと一息 生井、本図、古山

その後、皆で夢中になり佐藤以外は数匹づつ釣り上げ、夕食は、イワナの刺し身、岩魚汁、塩焼き、そして、骨酒とまさにフルコースを味わう。どうもごちそう様でした。

4日目の朝も曇りで、水も少し濁っていたが出発する。増水した水に気を付けながら順調に赤牛沢付近にきたとき突然本図さんが大声を上げる。どうしたのかと思ったらなんと、シューズが壊れたのである。（詳しくは、岳人11月号参照。）とりあえずシュリングで結び付けるが、しばらく行くとすぐに剥がれた。何とか岩苔小谷まで行き、エスケープすることにする。

しばらく沢筋に沿って、遡行すると、突然赤矢印が出てきて、ルートを教えてくれる。ここで、少し食糧を食べ、登攀具を仕舞い、長い長いエスケープに行く。かなりの急登を続け、ようやく高天原手前の夢の平につく。夢の池を見学に行き、高天原の温泉を尻目に水晶を目指す。これまたなかなかの長い登りである。いつの間にかガスが沸き、雨も降りだし、稜線に出ると、ものすごい風雨となった。水晶の手前30分ぐらいの所にピバーク地を見つけ、ツェルトを張る。強風の中、ポール無しで張るのに随分苦労し、ようやく中に入るとそこはもう天国である。お茶を沸かし、飯を食



赤牛沢手前のゴルジュに行く

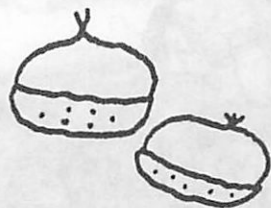
い、暖かくして寝る。夜中にツエルトが倒れたがかまわず寝続けた。隣は起きたらしく2時過ぎから起こされた。

まだ風の強い中、すれ違う登山者にどこからかと首をかしげられながら、今山行中最高到達点である水晶小屋を目指す。この後真砂岳手前で竹村新道を行き、湯俣へとおろし何とか無事に林道へ出た。高瀬ダムまで最後の力を振り絞り、何とか無事に山行を終えた。

今までとは違う沢として、非常に充実した夏合宿でした。

- 12日 扇沢 (7:30) - 黒四ダム (8:10) - 平の小屋 (10:45~12:00) -
船 (12:00~12:20) - 奥黒部ヒュッテ (14:00~14:45) - ビバーク地 (17:00)
- 13日 ビバーク地 (7:10) - 下の黒ビンガ (7:35) - 広河原 (12:20~12:45) -
金作谷出合 (14:30) - ビバーク地 (16:00)
- 14日 停滞
- 15日 ビバーク地 (6:25) - 赤牛沢出合 (8:25) - 岩苔小谷出合 (9:15~9:45) -
↑印の所 (10:20~10:40) - 夢の平入り口 (11:40~12:00) -
雲の平への分岐点 (13:10~13:30) - ビバーク地 (17:30)
- 16日 コースタイム不明

(佐藤 記)



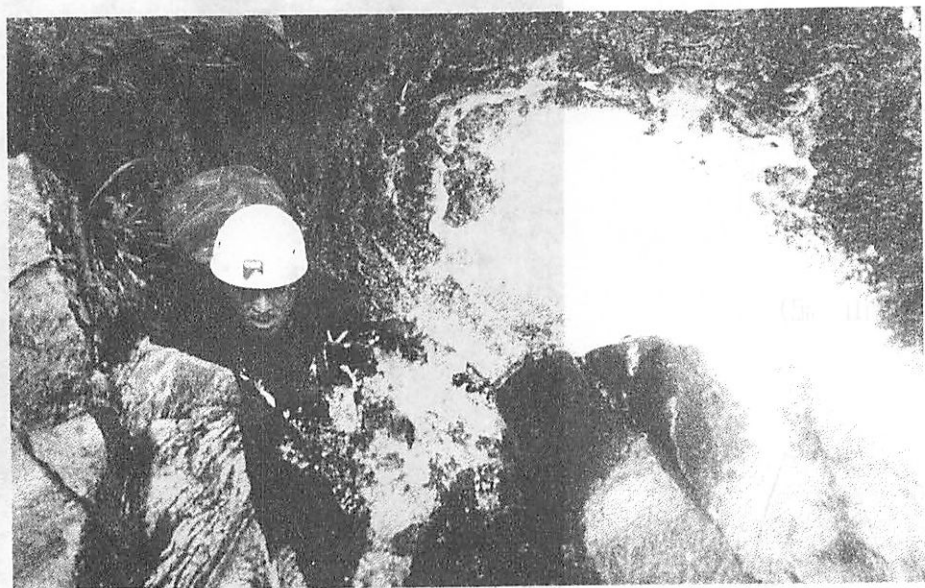
谷川岳南面ヒツゴー沢

1993. 8. 22

パーティー L 本図一統、庄司真陸、馬淵勝則、古山正文

今年は異常気象で深刻な冷夏だったが8月も下旬に入ってからようやく暑くなりはじめ、沢登りに適してきた。ひと昔前は、ヒツゴー沢は一の倉沢の岩場を登るための丹沢→ヒツゴー沢→マチガ沢→一の倉沢という登はん訓練システムに組み込まれていた沢だったそうである（本図談）。下館から谷川温泉に向かって出発。温泉街奥の沢そばの駐車場に駐車、車内小宴後、本図さん以外はバーベキュー小屋のベンチで就寝。

翌朝、朝食後谷川沿いの登山道をオジカ沢とヒツゴー沢の分岐の出合へ向かう。出合には、我々を含めすでに3パーティーが入渓していて、この後も数パーティーを見かけ人気のある沢である事がわかる。この出合で入渓の仕度をするが、馬淵君は沢登りはじめてであり、地下足袋にわらじという姿である。水は冷たくなく、積極的に泳ぐ



シャワークライムの馬淵

ようにとの本図さんからの指示が出る。そしていくつかの釜に飛び込み滝の直登をねらう。馬淵君が水を飲み溺れそうになり、みんなで笑いころげる。3段20mの滝は右から登るのが普通らしいが、本図さんは真ん中から、庄司君も続いて果敢に登る。ゴルジュ入り口の10mチムニー滝は滝中段までのつるつるの岩をトラバースぎみに近づいてゆくのが厭らしい。つぎの20mチムニー状滝はチムニーの右側を登る。これを過ぎると小滝の連続となり谷がぐーんとひらける。ほどなく右岸の中ゴー尾根への沢へ分ける。約40分ほどで中ゴー尾根に出る。尾根から見えるオジカ沢にはまだたくさんの残雪が残っている。中ゴー尾根を下り出合いに戻り、朝来た登山道に戻る。谷川温泉では、最近できたらしい町営の温泉“ユテルメ”に入る。料金500円であったが、露天風呂もあり沢の音を聞きながら温泉につかるのもなかなかである。食事をして帰路についた。

谷川温泉(6:05)―二俣
(7:20)―入渓地点(7:30～
7:45)―中ゴー尾根(13:25)
―谷川温泉(17:00)

(古山 記)



チムニー滝を登る

谷川岳西面笹穴沢

1993. 8. 29

パーティ L 本図一統 古山正文 庄司真陸

メンバーは本図さんと古山さん、おまけで私の3人である。猿ヶ京を通り川古温泉に着いた。途中本図さんの鷹をひっつかまえたはなしはいかにも本図さんらしくておもしろかった。ゲートがあるので車はここまで、仮眠をとる。車中は暑いので外で寝たが、蚊は古山さんが相手をしてくれたおかげで私の方はほとんど被害を受けずに済んだ。

翌日、さっそく林道歩きから始まる。2時間近くも歩いたろうか、金山谷出合に着く。さあ、いよいよ遡行開始だ。しかし、その前にいったヒツゴー沢と記憶がごっちゃになってどっちがどっちだかよく思い出せない。馬淵くんもいたのがヒツゴー沢で、馬淵くんがいなかったのが笹穴沢だというのは憶えている。どっちも悪戦苦闘して大いに本図さんと古山さんの手を焼かせたのは確かだ。そしてより難易度が高く、



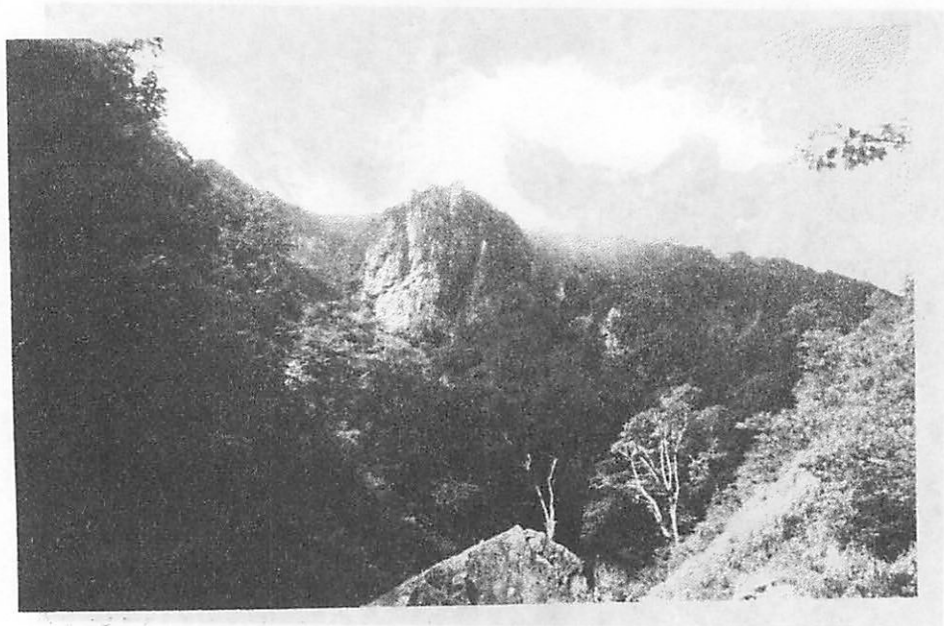
緊張の直登 古山、庄司

さらに御兩人に迷惑をかけ呆れさせたのが笹穴沢であった。いかにも滑りそうなナメもこわかったが、「大丈夫だからさっさと来い!」と、もたもたする私に半分本気で怒っていた本図さんはもっとおそろしかった。

しかし、前にスニーカーでやってきているおにいさん達がいるのには驚いた。無条件で尊敬します。とにかくえらくたいへんだったが金山沢と笹穴沢の分岐も思い出せない。それだけパニックだったのだろうか。

やたらに長い沢で、そのうえ私がブレーキをかけてしまったこともあって平標山頂上直下の一般登山道に着いたときには、大源太山を経由して川古温泉に戻る長大なルートはあきらめていた。平標山の家へと左下へ今登りつめた笹穴沢を見おろしながら下り、そして元橋へと平元新道を一気に駆け下った。

元橋でタクシーを呼んだ。ディズニーランドのような違和感あふれる小学校と夏休みの図画の宿題が終わらないのか、車から降ろされひとりおいてけぼりをくってスケッチブックに向かう子供が印象に残る。そいつは我々がタクシーを待つ間、一度もスケッチブックと取り組もうとしなかった。そんなものを観察するしかないくらいタクシーがくるまで暇だった。



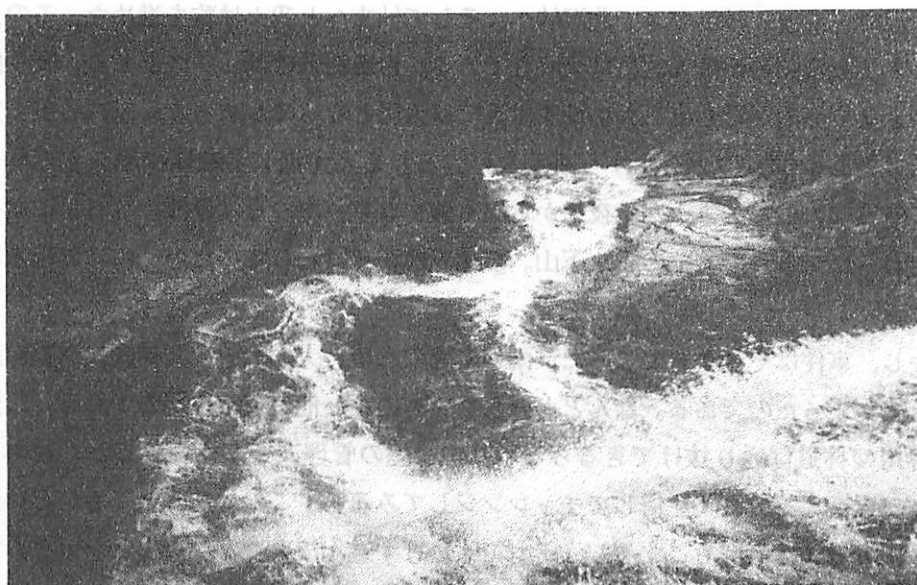
クロガネ岩峰

タクシーで三国峠を通り、川古温泉に着く。帰る途中、湯宿温泉に寄る。タダ（本当は寄付金100円を払わなければならない）でしかも空いていたので好評だった。

帰路は桐生の花火に伴う大渋滞に巻き込まれ散々、神栖に着いたのはまたもや午前様だった。

川古温泉(6:05)ー金山沢出合(7:17~7:40)ー笹穴沢出合(8:45~9:10)ー
二俣(12:00)ー枝沢入口(13:40~14:00)ー登山道(14:35~14:45)ー
平標小屋(15:05~15:10)ー三国小学校(16:25)

(庄司 記)



120m大ナメ滝を登る

(5月 晴れ)



仙丈岳

1993. 9. 7~10

パーティ 馬淵勝則、他2名

茨大WV部の自主山行で南アルプスの仙丈岳に登った。台風接近のニュースにもめげず20号を山梨へ。真夜中、夜叉神峠を越え、大樺沢で一泊した。しかし、夜叉神〜大樺沢間の林道はすごかった。なんて言うのか、よくもこんな奥地に道をつくったもんだと感心してしまう。さぞかし建設費もかかったことでしょう。あとで調べたのだが、この林道の建設時は長良川河口堰と同じくらいの大反対があったそう。73には付近のブナ林が絶滅してしまったらしい、とんでもない道路である。

大樺沢で一泊後、村営バスで北沢峠へ、そして仙丈へと我々は駒を進めた。この人気のなさと森の深さが個人的には大好きである。台風接近のニュースどおり、登り始めてまもなく小雨が降り出し、小仙丈付近では大雨となってしまった。ガスも多くて甲斐駒は勿論、仙丈のカールすらみえない。とりあえず仙丈岳避難小屋へもぐりこみ、この日はここで泊まった。夜半から風も強くなり、次の日は停滞。3日目になっても変わらなかったのもそのまま下山。夏休み前から計画していたわりにはお粗末な山行でした。

しかし、事件はそれから起こった。雨量多過のため、大樺沢〜夜叉神間の林道が封鎖されてしまったのである。なんとか帰れないものかと他の道路を探して見ると、発電所専用の林道は通り抜けできるらしい。山小屋の管理人さんに尋ねると“通れるよ”との返事。その言葉を信じてチャレンジしてみると、この林道がとてもひどい道だった。車の底は何度もこするし、それでもめげず進んでいくと、なんと、ガケくずれが発生、道の途中が土砂で完全に埋没しており、その先に道はなし。もう少し時間がずれていたら、車もろとも富士川の支流に埋まっていたかもしれない。生きてて良かった。

(馬淵 記)



初体験 IN 足尾沢

1993. 9. 11

パーティ L 本図一統、生井一男、古山正文、佐藤文則

この沢は、佐藤を除く3人にとっては7月の雪辱戦である。前回は滝を2つ程越した所で残雪に阻まれたらしい。今回はいくら何でも雪は無いだろうと今年の野望の一つを片付けるべく再び挑戦することになったのだ。ここに、夏合宿で”ひょうそう”にかかった佐藤が復帰第一戦で加わった。

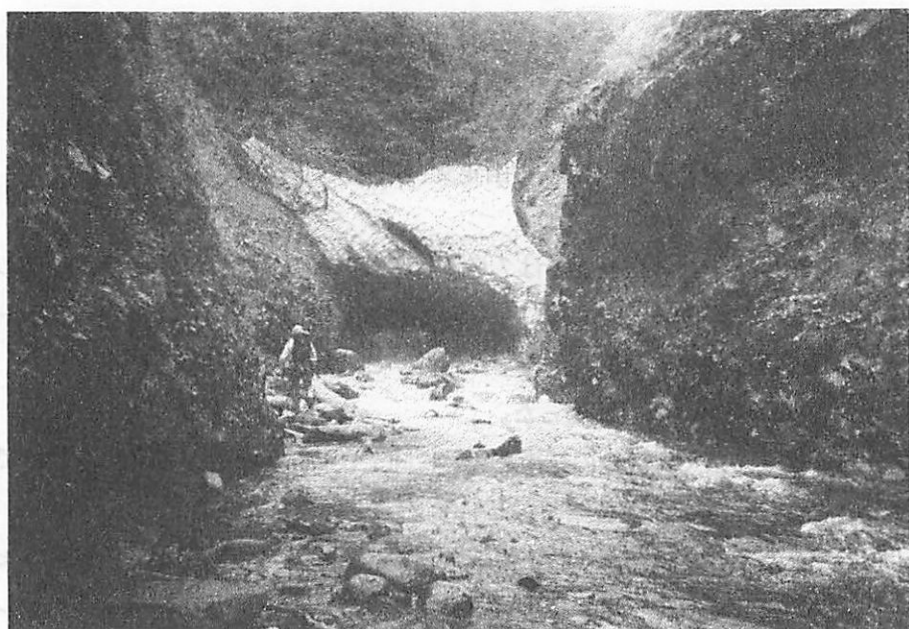
このメンバーは夏合宿で沢登りの技術を大いに向上させ、もうどんな沢でも選行できるのではないかとと思われる位素晴らしいメンバーたちである。

さて、勝手知ったる彼らに連れられて現地に着き、まずは自転車を置く。途中ちょうど道路の舗装工事の最中で、自転車を置いての帰りには流石に、こいつらは何をしてるんやという目で作業員のおっさんに見られた。寝る場所を探してうろちょろしたが、結局前回と同じ場所に決まり、運動施設の集まっている所の外れに車を止め、沢の状況などをあれこれ話ながら寝た。夜半雨が降りだし古山氏が避難してくるというハプニングがあり、朝を迎えた。

雨はかなり小降りになってはいたが、まだ降っているという状況の中出発。

前回のメンバーからアプローチがかなり悪いと聞いて想像していたよりは、はるかに良い道を飛ばす。足尾沢出合に着くと既に釣師が入っている様である。ここで、登攀具をつける。少し沢に入ったところに釣師が3人程集まり魚をさばいている。本図さんは大変悔しそうである。すぐに第一の滝となり、右から巻く。2つ目の滝を越し3つ目にかかったとき、ここで前回は引き返したと聞く。今回は、流石に雪渓は落ち、無事に通過する。この後は、素晴らしくきれいな、そして、恐ろしく冷たい水に入っただけの徒渉や、いやらしいトラバースを重ね、先へと進む。滝そのものの登攀はそう難しい事はなく順調である。大きな釜をもつ滝を右から取り付き、左に抜けて巻いたり頭も使った選行である。これが、沢登りは総合登攀と言われる所以かと思ひながら選行する。

と、そこに立ちはだかる白いものが見えて来た。まさかの雪渓である。幸いにも、この雪渓は無事に通過することができた。しかし、雪渓をくぐるのは、楽しくもあり、恐ろしくもあるものだ。



また出てきたスノーブリッジ



2段25m滝にて

しばらくゴーロを行くと、大きな滝が見え始める。まさに大滝である。40～50mの垂直な滝である。途中大きなものは何も見当たらない。とんでもない滝である。これを大高巻きするのかと眺めながら取り付きを目指していた時、そのすぐ下辺りでバランスを崩し落ちた。落ちた距離は、2～3mだったろうか。とにかく、体がフワッと浮き、まずいと思ったら水面が目の前にあり、もうどうしようもなかった。初めての大きな滑落である。仰向けに寝転がり、動けなかった。幸い水深が浅く、それ以上流される事はなく皆に助けられた。しばらく休んだ後下山を開始する。最初はふらついたりもしたが、メンバーに助けられ何とか下山することができた。

メンバーの皆さん本当に迷惑をかけ申し訳なかったです。そして、無事に下ろしてくれてありがとうございます。

今回の経験により一番強く感じたのは、どんな所でも気を抜くな、ということである。大滝を間近に見、その巻き道を目で追いながら登っていたのが一番の原因であると思う。これからは、もっと注意深く行動しなくてはと思う。おっちょこちょいの自分にできるか不安だが、出来る限り慎重に行動するようにしようと思う。

(佐藤 記)



40m大滝下にて

西藏旅行——チベットからの手紙

1993. 9. 11～26

村上晴美

今日、チベットを旅しながら毎日出した葉書の最後の一枚が、一カ月半かけてやっと届いた。14枚の葉書の中には、切手がはがれてしまったものもあったが（中国の切手には、のりが付いていないのを知らなかったので、無理やり葉書に押し付けて投函したもの一枚である）。全て届いたということは、中国、ネパールの郵便事情はなかなか良いようである。

9/13付—みんな元気ですか。今、9/13午後3:30ですから、日本では4:30になる頃です。とうとうチベットにやって来ました。晴れていて、とても気持ちが良いです。ここ（ツェタン）の標高は3400m位だとのこと。今日、ラサまでの飛行機からは、ナムチャバルワもとても良く見えました。

9/14付—今日は、ツェタンの町にある昔の王様のお墓を見学に行きました。地



水筒を買いたいといった、おじさん

元の人々は、麦刈りや脱穀に忙しそうです。風景は日本の秋とあまりかわらないような気がします。昨夜は、ちょっと頭が痛くなったので高山病がはじまったかなと思いましたが、寝たら直りました。とても元気です。

9/15付—今日は、サムイェのサムイェ寺を見学して、それからチベットの中心であるラサにやって来ました。サムイェには船で川を渡って行くのですが、帰りの船でチベット人のおじさんに、私の持っている紫色の水筒を売って欲しいと言われました。「100元(2000円位)ならいいですよ」と言ってみると、「それは高い」ということになり、結局売れませんでした。

9/16付—今日は、ラサの町の中にある蔵医院という病院の見学をしました。チベット医学の大まかな大系は8世紀頃には既にできあがっていたということで、とても進んでいたのです。診察を受けてみたい方はどうぞということでしたので、上海以来口内炎に苦しんでいた私は、さっそく診てもらって薬をもらいました。小梅位の大きさの黒っぽい丸薬です。これをぬるま湯に入れて口をゆすぐということなので、やってみます。

9/18付—今日は、ラサ市内からバスで2時間位のところにあるガンデン寺という所に行く途中、道が崖崩れで通行止めになっていて行けませんでした。ブルー・ポピーが咲いているかもしれないので残念です。チベット高原の日射しはとても強く(ラサは、



峠にはためくタルチョ

3600m位です)、私はチベット人と同じ位に黒い顔になってきました。チベットの民族衣装を着たら、現地人だと思われるかもしれません。

9/18付ー今日は、ポタラ宮の見学をしました。修理中の部分が多くてあまり見ることができませんでしたが、なかなか興味深いものです。ポタラ宮は富士山と同じ位の高さにありますが、私は高度順化もすっかり完了して、いたって元気です。ただ、ちょっと団体旅行につかれてきたような気がします。やっぱり旅は一人がいいかもしれません。

9/19付ー今日は、シガツェという町にいます。今日から西へ向かっての旅が始まりました。途中でカンパ・ラという峠を越えて、ヤムドウク湖という湖のほとりを通り過ぎて、やっとホテルに着いたのは夜の9時でした。夜の9時頃でも西の空はほんのりと明るく、そのかわり朝は7時か7時半頃にやっと夜明けです。

9/20付ー今日は、シガツェの町にあるお寺巡りをしました。チベットに来てから、毎日いろいろなお寺の見学をしているので、頭の中が・赤・黄・緑・青・白・金色の仏像やマンダラなどで、渦巻いています。明日はシガツェからシェーカルに向かって、また西へ西へと進みます。途中で越える峠の標高は5220mとのことです。もしかすると、チョモランマが見えるかもしれません。



中国・ネパール国境にて

9/21付—今日は、シェーカルという町にきています。ジャツォー・ラという峠（5220m）を越えたすぐ後で、雪が降ってきました。チベットはもうすぐ冬のようにです。人々は麦の刈入れ、脱穀にいそがしく、家々をとりまく塀の上には、ぎっしりと冬の間の燃料に使うヤクや牛の糞が積んであります。チベットは、たぶん昔の日本がこうであつただろうと思われる生活を想像させてくれます。

9/22付—今日は、ネパールと中国の国境までやってきました。明日、ネパールに入ります。今日はお天気が良ければ、チョモランマ、チュー・オユー、シシャパンマ等が見えるはずでしたが、残念ながら見られませんでした。国境の町ザンムーというところは、標高2300m位にある町なのですが、川というか、ものすごい渓谷のすぐそばに、張り付くようにしてできている町で、日本の温泉場の景色に似ています。

9/23付—今日は、とうとうチベットからネパールへの国境を越えました。ネパール側は、天まで続いているような山腹に作られた千枚田も青々としていて、今まで見ていたチベットの景色とは全然異なっています。またそれが新鮮でおもしろいのです。国境を越えてすぐのあたりで、猫をみかけました。チベットでは全く猫を見なかったのです。しかし、チベットにも猫はいるそうで、ただ家の中でかわいがって外には出さないのだそうです。

9/24付—今日は、一日中カトマンドゥの町の中を観光したり、歩き回ったりしました。薄い大気と、乾燥した空気になれていた私の体には、この町の暑く重いような空気に順応するのにしばらく時間がかかるようで、風邪をひいてしまいました。チベットの空がとてものつかしです。今日は朝5時半に起きて、チョモランマ（サガルマータ）まで飛ぶ飛行機に乗るはずでしたが、天気不順のため、飛べませんでした。また、明日の朝、早起きして山を見に行きます。晴れるといいのですが。

追記

届いた葉書はこれで終わりなのだが、さて、ヒマラヤは見られたのだろうか。私の部屋にはカトマンドゥで買ったヒマラヤのポスターが2枚貼ってある。これを心の糧にして、次にネパール、チベットに行くまでヒマラヤをこの目で見るのはおあずけである。つまり、ヒマラヤは私に「また来いよ」と言ってくれたのである。

ACCJ—茨城のヒマラヤ遠征はいつになるのだろう。

《旅行日程》

- 9/11 成田→上海
- 9/12 上海→成都
- 9/13 成都→ラサ（クンガ空港）→ツェタン
- 9/14 ツェタン
- 9/15 ツェタン→サムイエ→ラサ
- 9/16 ラサ
- 9/17 ラサ
- 9/18 ラサ
- 9/19 ラサ→ギャンツェ→シガツェ
- 9/20 シガツェ
- 9/21 シガツェ→シェーカル
- 9/22 シェーカル→ザンムー
- 9/23 ザンムー→カトマンドゥ
- 9/24 カトマンドゥ
- 9/25 カトマンドゥ→バンコク
- 9/26 バンコク→ソール→成田

(村上 記)



アプローチのような大雲取谷遡行

1993. 9. 19

パーティ L 本図一統、古山正文、生井一男

何故だか今年の山行は、夏合宿以来、沢のぼりが多くなってきた様な気がする。以前は余り行かなかったと、自分でも不思議に思う今日このごろである。何故、でしょうかね？ 急に岩のぼりの山行より、遡行の割合が多くなってきたのは、どうしてでしょうかね？ たぶんその要因の一つには、これは、あくまでも私の推測なのですが？ 多分、本図さんか、古山さんは、マインドコントロールと言うやつ、出来る人間で、その能力で私を操っているんじゃないかな？ ソウダ！ そうに違いないと一人、思う私です。（純真な私は、特にかかり易いのかもね）貴方は、そう感じた事はないですか？（沢の先生様冗談ですので怒らないでちょ！）『んーな！くだらな事言っている暇あるんだったら、とっとと原稿を書けてっかハイハイ分かりました。それでは今回の遡行、大雲取谷について書かさせて戴きますです。ハイ』

今回も、本図さん、古山さんの超最強コンビと9月19日の日曜日に、日帰りの予定で遡行に出掛ました。今回は奥多摩なので下妻市役所に集合になり、私は、自分の会社である平河ヒューテックで待ち合わせなので、今回は私はとても楽でした。そして、午後9時40分に三人は集合し、大雲取谷を目指し超高級デリカを走らせた。奥多摩～日原～大ダワ林道と進み、林道を入れる所まで入って車を駐車した。他にも2台車が有り、結構こんな所まで人が入っているんだなと思った。（多分釣り師だと思うけど）そしていつもの様に一杯やって就寝。

翌朝は7時に起床、眠い目をこすりながら外をみる。空模様を見ると今にも降りそうな感じで、何か行く気がしないなあと思っていると、古山さんが空を見ながら『もう！いやんなってくるなあモウ』とボヤキを連発していた。やっぱり沢を登るのには、晴れた暑い日にがぎると思いますです。暑い日なら喜んで私も飛び込みましょう。皆さんはいかが思いますか？… 結局、ブツブツ言いながらも、ここでゼルバン（今はハーネスと言うが）を付けてガチャもガチャガチャと付けて準備をし、林道から入渓すべく沢まで下降して行く…と、あっと言う間に沢に降りられた。今回の様にアプローチの短い沢が私は好きだな！、そして、遡行開始となる。今回は流れに入らず、水線通しに河原の岩場に行く。直接入る訳じゃないから膝下までしか濡れな

い。だからいつもの様にずぶ濡れにはならなかった。本流はゆるく右折した先でゴルジュとなっていたが、今まで見た様な感じでは無く『これが、そう?』てな印象しかなかった。そこを右から越えていくと、7 m 滝があり、ここは楽に越せた、そして谷は穏やかになり、左岸に大ダワ林道とわかる木道も見ることが出来る。ここで谷は二俣となり、右には熊穴窪、左は六間谷と名を変えた本流が続く。

ここは、何とか窪て言うのが多かったな。ここまで来て、せっかく付けたハーネス & ガチャを、全然使っていないことに気がつく『もう! 一体何のために付けていたのかな? リポビタンDのファイト一発! のCMの撮影の様だ』(何の意味もない、ただの飾りだなモウ→いわゆるヤラセみたいだ) 我々は、右に進路とり、熊穴窪をつめて大ダワ林道に出た。後は林道を車の所までテクテク歩いて行く。今までに、黒部上の廊下とか、足尾沢とか行って来たので、この沢がそれらのアプローチより簡単に思えるのは私だけかな? そういえば本図さんも同じ様な事言っていた気がする。ちょっと物足りない様な気もする。などと話しながら車に到着。

時間は少し早いので、日原鐘乳洞を見学した。鐘乳洞の前には凄い岩壁が有って、おおい被る様に迫って来る。本図さん、いわく『俺が20才の頃、水島さん等と来て、お巡りさんに見つかり、降りて来い、降りない、で一悶着が有ったが、結局登った方が安全と言う事にして、登った記憶が有るなあ』と懐かしそうに

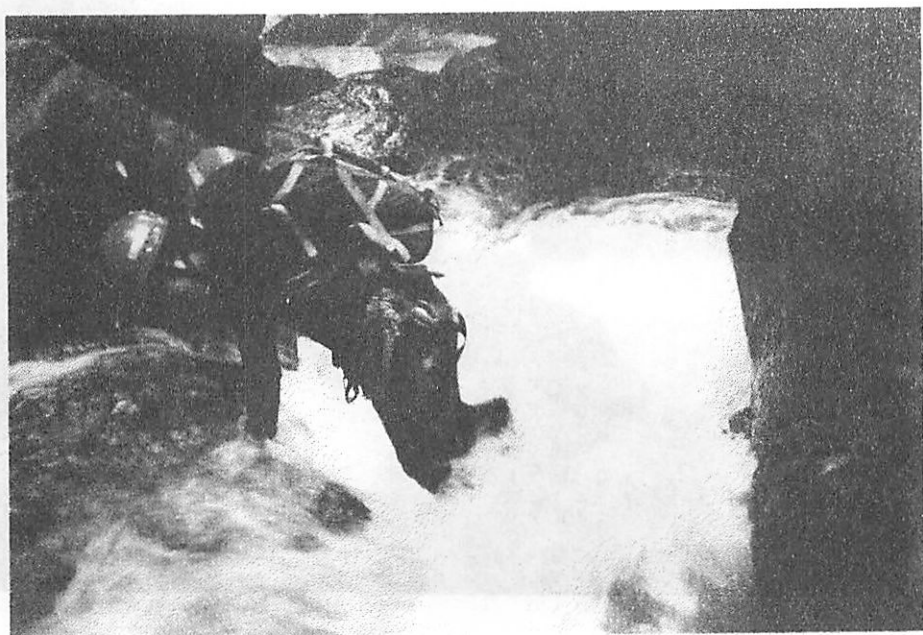


大雲取谷を行く

話していた。俺も、まだ17才の頃に鷹ノ巣と言う山に登りに来た時に、ヤッパリこの岩壁を見て、岩登りに興味を持った様に記憶している。何だか懐かしくあの時の思い出が込み上げる。あの時は、真冬に来て余り人がいなかった様に記憶しているけど、今はスゴイ人だらけ、車だらけでつくづく時代は変わったなと感じた。

ここ、日原鐘乳洞から車で帰るには、道が狭く擦れ違いが出来ないので所々交互通行になる。だから運転手は大変だ。それなのに無理して、突っ込んでくる馬鹿野郎が、いやがる。私は、引っ込み思案な性格なので何も言えないけど、本図さんは窓から体を出して、馬鹿野郎にき〜つく『なんで、突っ込んでくんだよ！このばかやろ！どこ見て運転してんだあ〜、コラ』と怒鳴っていた。聞いてて気持ちの良い響きである。初めて会った頃から本図さんは、一種独特の威圧感と言うか迫力があつた。結局、私の中では、遡行より懐かしさだけが大きかった様に思えました。たまには昔の思い出の山にでも行ってみようかなと思う一日でした。

車 (7:40) — 唐松橋 (7:45~7:55) — 大雲取谷出合 (8:20) —
小雲取谷出合 (10:15~10:45) — 熊穴窪 (11:40~12:25) — 大ダワ林道 (12:35)
— 車道 (13:35) — 車 (13:50) (生井 記)



水とたわむれる古山

あーあ、やっと来たのに・・・中岩沢

1993. 9. 25～26

パーティ L 本図一統、生井一男、古山正文

夏山合宿が船外機の不調で急遽、中岩沢から黒部上の廊下に変更したため、今回この山行が組まれた。さて船外機の調子はいかに・・・

第2黒又ダムに到着後、いつものドタバタを少々。今回のドタバタはなんだった？それはね、借りた舟がどれだかわかんないの。でも20分ぐらいで探し出したので、上出来でしょう。どうも最近寝る前にドタバタをしないと山に来たような気がしなくなったようだ。ビールを飲んで寝ましょっと。

25日。眠い目をこすりながら、舟を湖に浮かべる。あっ浮いた！あたりまえか。次に問題の船外機である。エンジンをかけてみる。ブスブス、ブスブス、あれっ！どうしたんだべ！家でかけたときは一発でかかったのに。再度トライ、ブブブブ・・・・・・ブーン きー行くべー。荷物を積んで出発だ。エンジン全開、中岩沢



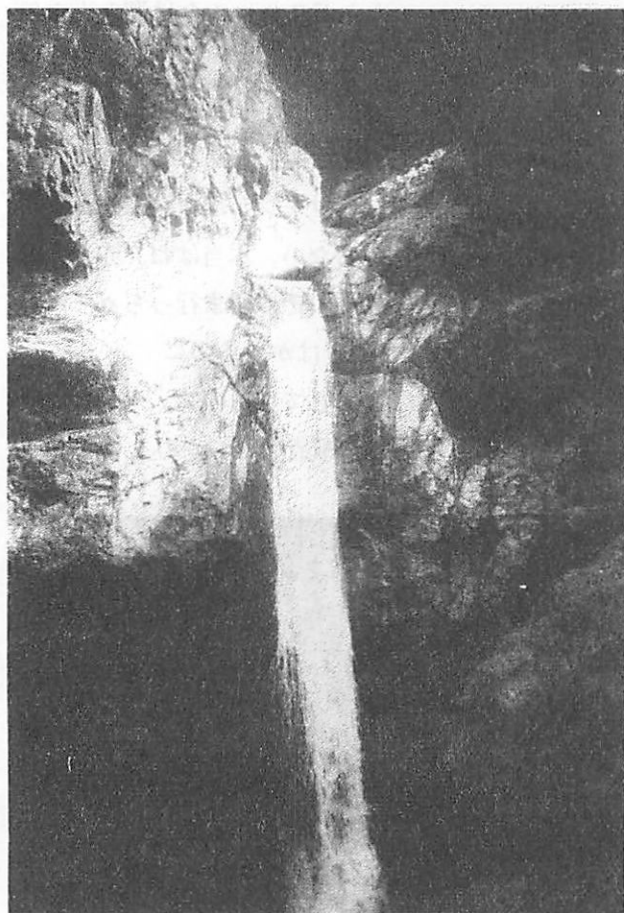
ボートで出合に向う

へ快調に向かった。ブスブス・・・シーン ありゃ！なんだこりゃ！今は湖の上なのに・・・再度トライ、プブブブ・・・ブーンOKの合図を2人におくる。古山が不安そうな顔で“いったん岸に戻って、調子をみてから出直しましょう”と言う。“あほんだらが、俺の国際免許の腕を信用してないな、ばかたれ”と反論したかったが、素直にいうことをきいた。岸に向かうと今度は絶好調なので、Uターンし中岩沢に向かう。スロットルは全開、スピードはコンコルドに勝るとも劣らない。本当はね、赤子に触る気持ち。むやみに動かすとエンジンがダダをこねるので、そのまま行っちゃったわけ。中岩沢出合まで25分、さすが早い。歩いたら丸1日はかかるのに

早速入渓。右岸をへつる。バックウォーターがここまできているので、へつる以外方法がない。東の沢出合までは入渓者が多いとみえて、巻道もしっかりしてるし、フィックスなどもある。東の沢出合から先は側壁も高く、巻くことも、おいそれとはいかない。ここからが戦闘開始だ。すぐに泳ぎが始まる。まずザイルをつけて生井がアタックするも、溺死寸前で敗退。次に古山がアタック、30m泳いで左壁を登り無事パス。続く釜も生井がアタックするが、またもや溺死寸前で敗退。どうも彼は本日調子が悪いようだ。古山アタック、20m泳ぎ切るが、滝が登れず敗退。こうなっては、いよいよ真打登場である。なに！真打ってだれかって。それは我輩であります。真打は苦労することなく、ここをパス。この先すべて泳ぎと直登で前進する。だって巻く事はでき



東沢出合上のゴルジュにて



二俣下の30m滝

ないし、たとえ巻いたとしたら、直登より悪いと思う。やがて30m滝に行く手を阻まれる。これは左岸から巻こうと登るも悪く、懸垂で滝の中段まで降りて、右壁をハーケン1本打ち落口にぬける。東の沢から二俣まで4時間もかかった。予定では西の沢を登って中の沢を降りるつもりである。中の沢を過ぎるとゴルジュも浅くなり、少し開放的気分になれる。30mナメ滝を過ぎ、しばらく登った所、不動の滝手前にあたる所の右岸に台地をみつける。今日中にもっと上まで行かなければいけないのだが、空模様がかなりあやしく、いつ降ってきてても不思議ではない様子だ。それにビバーク適地なるものがない。ここなら谷底か

ら10m以上の高さがあり、集中豪雨でもなければ心配ないし、いざというときは後のヤブに逃げられる。ここでビバークと決定した。

台地にフライを張り、薪を集め河原で焚火をする。焚火は楽しい。火を見ているだけで、今日の疲れが抜けていくような気がする。飯を炊いて食おうとした時、雨がやってきた。それも降りが強い。たちまち火が消えていく。とても表にはいられず、フライに避難し飯を食べた。夕立だろうとかるく考えていたが、この雨は断続的に翌日まで続くことになった。周りの壁は滝と化し、谷はたちまち濁流に覆われてしまう。この夜、私の頭の中はすでに登ることではなく、いかにして脱出するかを考えていた。

26日。幸い2、3時間前から雨は止んでいる。いつ又降ってくるかも知れないので朝飯も早々に行動開始。しかし、直後に猛烈な雨となり、30mナメ滝を降りるころは渡渉もままならぬ状態になってきた。二俣は西の沢の濁流と中の沢の濁流とが、もんどりうって暴れまわり、手がつけれない。中の沢の濁流はまさしく泥水で、どうして1本となりの沢がこんなに違うのか不思議にも感じられる。さてここからどうするかだ。沢通しに行くと、ダムに着くまでには身体がバラバラになるのは確実。山越しかあるまい。雨とガスで視界はなく、地図とコンパスだけが頼りだ。二俣から北西にある1122m地点を目指す。思ったより密ヤブではなく助かる。所々にある毒キノコの王様ドクツルタケが美しい。3時間も登った頃、地形から判断して1122m地点と思われる所に着いた。私はいつも高度計を持っているのだが、故障してしまい今日は持っていないのだ。ここから南西にのびる尾根を下り、600m付近から南に方向を転じなければならない。ここで私は生井、古山と賭けをした。舟を停留した場所から100m以内の所にでたら、ピールを2本ずつおごるというものである。さて結果はいかに？生井トップ、古山セカンド、本図ラストというオーダーで、私がコンパスを見て“右、左”と指示しながら進む。すると、かすかな踏跡らしきものがでてきたが、我々はコンパスの指示通りに進んで行く。この踏跡らしきものと何回も交差する。自分達と同じ方向に踏跡ものびている様だ。踏跡を行ってみる。この頃から天気が回復し、雲の切れ目からダム湖が見えてくる。よしOKだ、方向に間違いはない。やがて鉈目や切株を見つけ、人間の通った道であることを確認する。出た所はゼンマイ小屋の脇だった。ボートは目の前、ドンピシャリ賭けは私の勝ち。

今回は最後までドタバタ付きだった。予定より早く下りたので、ダム湖を一周観光遊覧して帰ろうということになった。エンジンをかけようとしたら始まってしまった。なにあって。例のことよ、ブスブスだよ。30分頑張ったが、ダメだ。こんな奥地に誰も来やしない。そのうち又、雨が降ってきた。ビバークを本気で考えた。よしもう一度やってみよう。船外機を舟からはずし、エンジンをかけてみると、かかったではないか“そのまま舟につけろ。早く乗れ。行くぞー”ブブブブブ・・・観光遊覧なんてことは頭の片隅にもない。あるのは、早く船着き場に行きたい、それだけだ。エンジン全開、舟はクィーンエリザベスなみ、スピードはスペースシャトルなみ、乗っている人間乞食なみ……。こうして我々3人の珍道中は終わったのであります。あー疲れた。

26日 ビバーク地 (6:30) - 二俣 (8:10) - 1122m地点 (10:55~11:20) -
ダム湖 (13:15~14:35) - 船着き場 (15:00)



《友好山岳団体の月報、会報紹介》

ありがとうございました

■ 月 報

◎Rohman NO.99 1993.7浦和浪漫山岳会

川内・仙見川、会津駒ヶ岳・下ノ沢、会越・塩沢川立安沢、
会越・蒲生川本流ほか

◎Rohman NO.100.1993.8浦和浪漫山岳会

会越・滝沢川、朝日連峰三面川竹の沢、黒部上の廊下、川内・谷沢川ほか

◎Rohman NO.101.1993.9浦和浪漫山岳会

東北・皆瀬川沼沢、川内・今早出沢太郎おとしの沢、谷川岳・西黒沢、
和賀・生保内川、川内・杉川源流の沢(記録多数)ほか

◎月報・Z A C NO.143 1993.7グループ・ゼフィルス

丹沢・玄倉川小川谷廊下、巻機山米子沢、屋久島単独縦走ほか

◎月報・Z A C NO.144 1993.8グループ・ゼフィルス

大菩薩・小室川谷、谷川連峰ヒツゴー沢、大雪山縦走、祖母・傾の沢ほか

◎月報・Z A C NO.145 1993.9グループ・ゼフィルス

大滝沢、南ア・野呂川扇沢、和賀・生保内沢、鳳凰三山、
北ア・似虎谷～北又谷源流

■ 会 報

◎山水19号29P常北山水会山岳部

春山合宿・槍ヶ岳、会津・田代山、白神山地、恋の岐川、竜神峡週行、
安達太良山、「もつ鍋」、ワイズユース雑感、部員名簿ほか

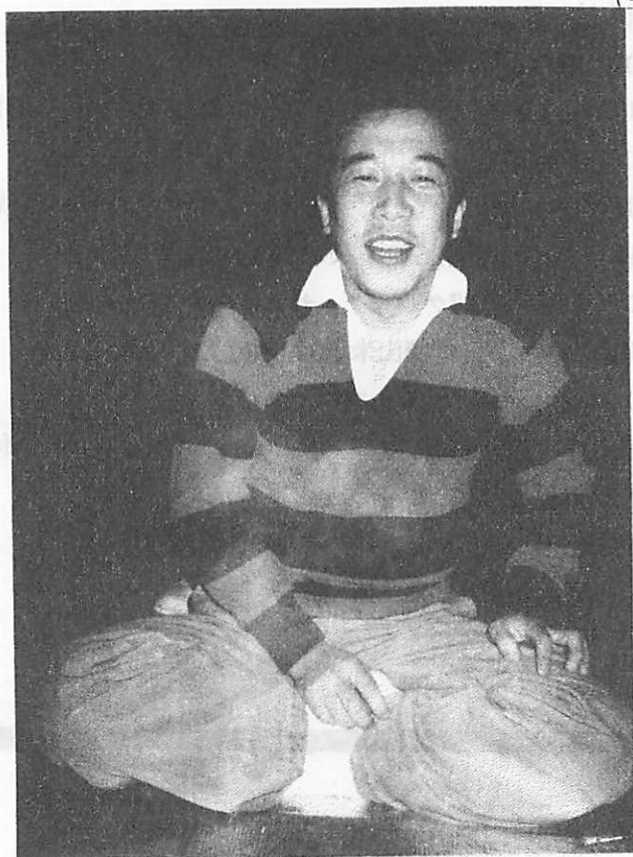


編集長の就任にあたり

集会で、いきなり変酋長に、今度、編集の仕事を頼むと言われ、快く引く受けることにしました。（心の中では、誰かの陰謀だと思いましたが？）

つきましては、編集については、何も知らない素人なので、これからは皆様の御指導及び御協力をお願い致します。また、とちりや行き届かない点も有るかと思いますので皆様、どうか暖かく見守って戴きたく思います。

（生井一男）



生井一男 新編集長



※ 編集後記

今やっと、10号の編集を終すことができました。2年半の間にはいろいろな事がありました。ワープロのワの字も知らなかった私が、ワープロの機械を買い、昼な夜なと訓練を繰り返し、やっとここまで打てるようになりました。ブラインドで打つとまではいきませんが、2年後、いや3年後にはブラインドで打てるように頑張りたいと思っております。これもこの会報があったからこそ、ここまで上達したのだと思っております。根っからのスケベに生まれた私の書いた記事のいやらしさから、この会にはいたたまれないと、会を去っていった人がいるとかいないとか、そのような話も耳にしました。自転車を覚えたてのころ、自転車に乗りたくて乗りたくてしょうがないときがあったでしょう。それと同じなのです。ワープロを打ちたくてしょうがないんです。でも私が打つとすぐエッチな話になっちゃうんです。チーフリーダーからは、変酋長のやっていることはセクハラです。と、きついおしかりをいただきました。会員の皆様、今までのことはどうぞお許し下さい。11号からは新編集長、生井一男先生の手にはバトンタッチされます。生井一男先生は清潔で明るい人間でございます。きっと会報も180度変わるでしょう。また逢う日までグッドバイバイ。

“ところで最近のヘアーヌード写真集はよー あっけねーひっこみまっす”



(音菜台州記)

季報「R&V」第10号 発行1993年 夏

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J 茨城

〒315-01 茨城県新治郡八郷町柿岡1997

本図一統方

編集者：土度助兵衛 音菜台州記
